

誌雜究研の居芝

道 獺 捕

輯八廿百第 年二十第

昭和十二年四月廿五日 第三期 印刷
昭和十二年五月八日 發行 每月發行
「道獺捕」 第百廿八輯 第十二卷 五月號

鐘道
三氏
中

不歌奮心

中修
卍



風味必ず御氣召す



大軌百貨店

大阪上六

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節向御料理

佛蘭西御料理

芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

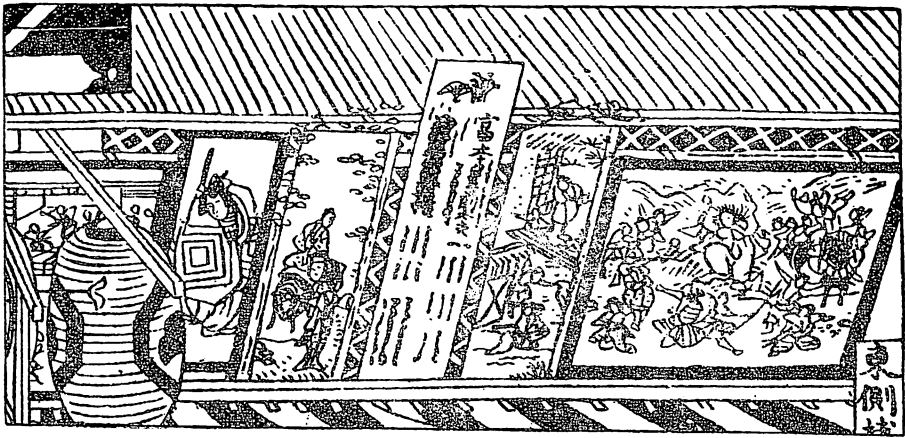
御芝居の歸りには打ち揃ふて

お座席では是非御會食を！

支店

大阪支店 心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋





★道 頓 堀 第十二年 第百廿八輯 目 次★

フラグ

◇歌舞伎座三代中村歌右衛門百年追善記念興行東西合同大歌舞伎寫真集◇中座
東西花形大歌舞伎舞臺面◇浪花座前進座特別大興行舞臺面◇角座關西新派劇舞
臺面◇文樂座舞臺面

『百太郎騒ぎ』の目當……………長谷川 伸 (三)

梅玉歌右衛門……………西尾福三郎 (四)

歌右衛門の習作時代……………森 ほんのほ (六)

三世中村歌右衛門略傳……………紙 魚 庵 (三)

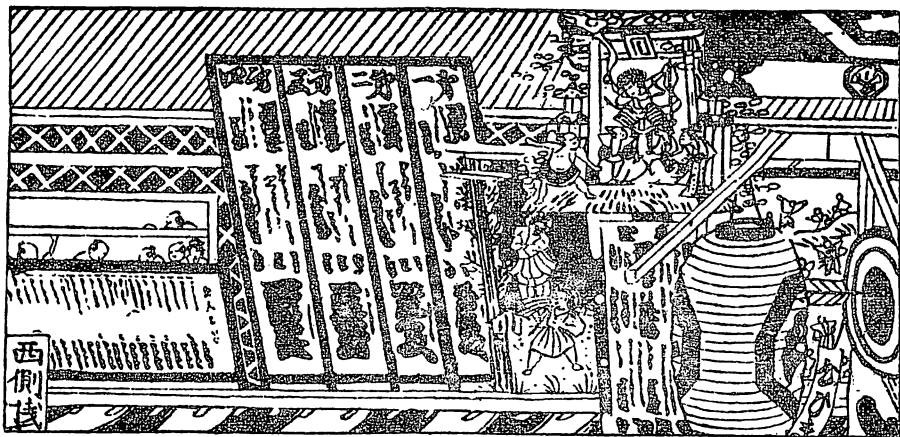
三代歌右衛門百年追善記念興行の際に
して

俊寛と松浦……………菱田正男 (八)

俊寛・淀君・暫……………大橋孝一郎 (四)

見たまゝと藝談

歌右衛門の持役 (春日局と淀君)……………山川 瞭 (八)



芝居
また見

百太郎騒ぎ(浪花座前進座)……………(三)
江戸育お祭佐七(中座花形大歌舞伎)……………(四)

劇交談又點!

青年歌舞伎立話……………姉小路 孝(毛)
革明兒「小太夫」考……………阪上 勝 芳(六)
東京新派ニ京都……………新派柳 一郎(三)

どうとんぼりせくしよん

漫才・鬼界ケ島……………大槻たもつ作・畫(三)

初夏に贈る

映畫のページ……………(三)

白井邸の劇的シーン……………(二)

梅かのこ……………(七)

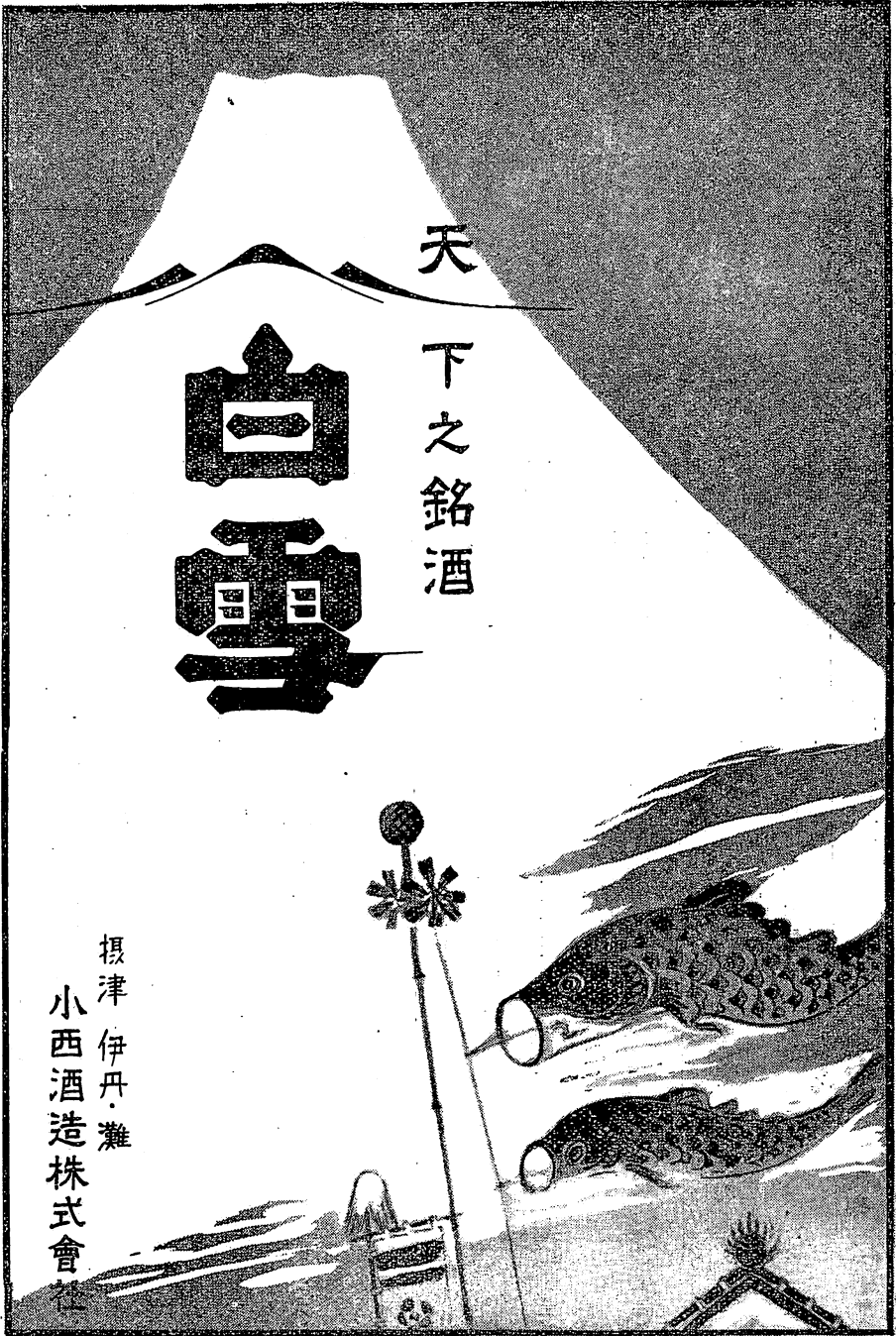
編輯後記……………大橋 孝一郎
池尻 勝彦

天下之銘酒

白雪

攝津 伊丹 灘

小西酒造株式會社





座伎舞歌

“庫襦”部の夜
方の淀の門衛右歌

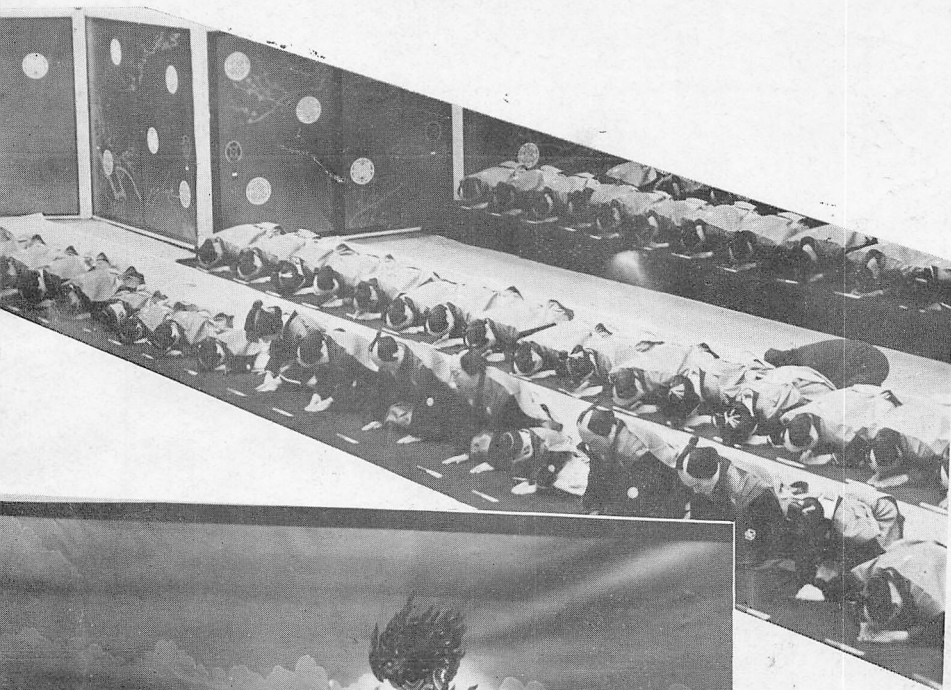
行興念記善追年百門衛右歌村中代三

伎舞歌大同合西東

東西合同大歌舞伎

歌舞伎座

← 豪華 // 口上 // 場



← 歌舞伎十八番
// 不動 //

三升の不動明王



← // 御所櫻堀川夜討 //
吉右衛門の武藏坊辨慶



局日春の門衛右歌 ↑

金鶏印罐詰 二大製品

- 1. 純良精選の牛肉
で御座います
- 1. 不意の御來客に
- 1. 御酒ビールの御友に
- 1. キャンピングに
- 1. ハイキングに
- 1. 各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
- 1. キンケイ印を御指定下さ
い



洋酒・食料品・罐詰問屋
 大阪市東區豊後町三番地
 株式會社 横山商店



歌舞伎座 五月 興行

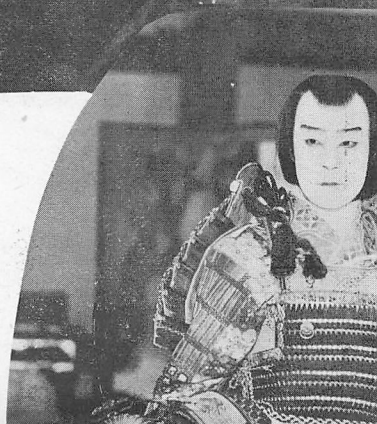
中 左 右
上 左 上

吉右衛門の俊寛と時藏の千鳥
// 平家女護鳥 // 舞臺面
魁車の大高源吾



右 下
左 下

魁車の秀頼
友右衛門の
浅尾太郎兼安



東西合同大歌舞伎

歌舞伎座



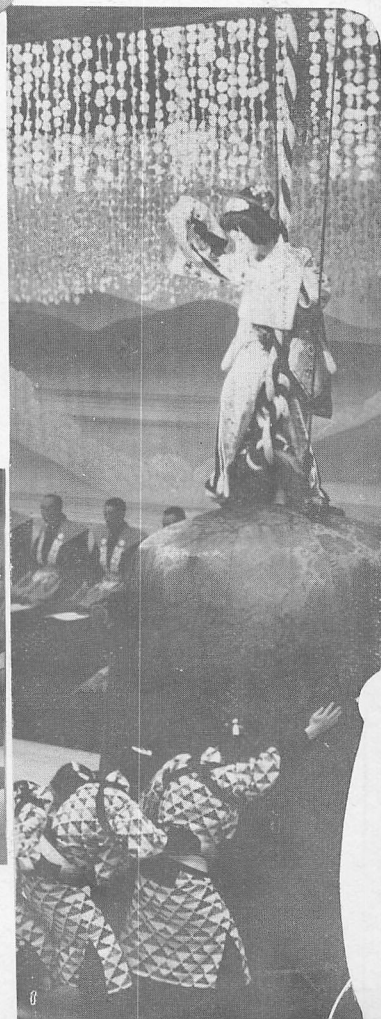
上 梅玉の丹波與作
右下 京鹿子娘道成寺舞臺面



← 埴生村 舞臺面



面臺舞 "節室小" 个





【主治効能】

胃酸過多、胃痛、胃潰瘍
 胃液分泌過多、胃虚腫、
 胃力タル、便秘、噯氣、
 溜飲、宿酔、船暈、車暈

制酸
 鎮痛

ノルモザン錠

【胃の防護】 ノルモザン錠の主効分たる珪酸アルミニウ

ムは、服用後、胃粘膜を被覆防護して、胃液の刺激を
 防ぎ、胃中で分解して、制酸と鎮痛効果を収めます。

【制酸作用】 珪酸と塩化アルミニウムとに分解し、前者は
 過剰の酸分を吸収して胃酸度を少くし、後者は胃腺を

【鎮痛作用】 尚ほ鎮痛作用を完たからしめるために、強力
 鎮痛劑たるロートエキスの適量を配してありますか

ら胃痛に對する効果は一層顯著に發現します。

【用法】 一回二錠宛、毎食前一時間位に水又は温湯にて服用す。

【價格】 本錠(一日分)三圓 一六錠(五圓) 四八錠(一四圓) 九六錠(二八圓)
 一六錠(五圓) 三六錠(一四圓) 全國知名の藥店にあり

發賣元 大阪市道修町 株式會社 武田長兵衛商店
 關東代理店 東京市本町 株式會社 小西新兵衛商店

茶

西區又守侍何畔

坐立半

南區又守侍何畔

東西花形大歌舞伎 中座

上 // 双蝶々曲輪日記 // の扇雀の南與兵衛

中 同 舞臺面

下 // 源平布引滝 // 舞臺面



味：香り：軽い酔
ひ心地：總て明朗
快適であるうへに
榮養も頗る豊富！
家庭の酒として推
奨すべきもの！



シパンヤシ檜林

シパンポ

大阪市東區京橋三丁目七五

株式會社

大

林

組

支店

東京、橫濱、名古屋、福岡、大連

營業所

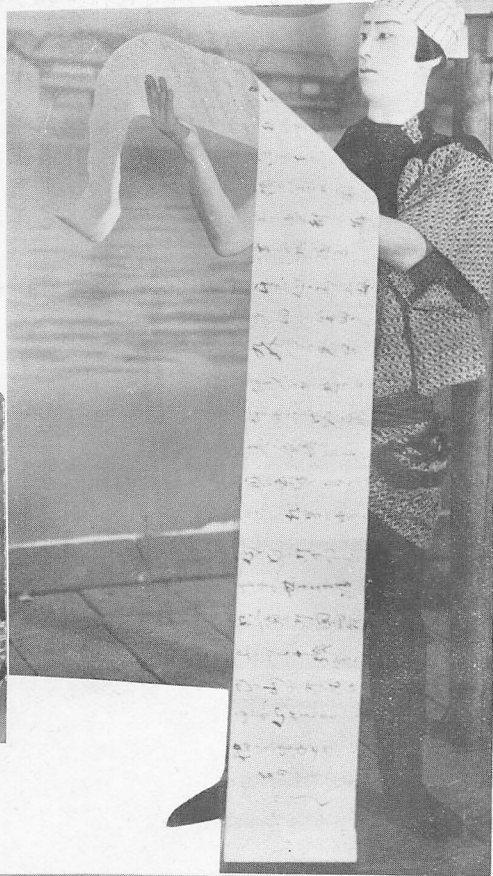
京都、神戸、金澤、静岡、廣島、
仙臺、京城、臺北、新京、奉天

工作所

大阪、東京

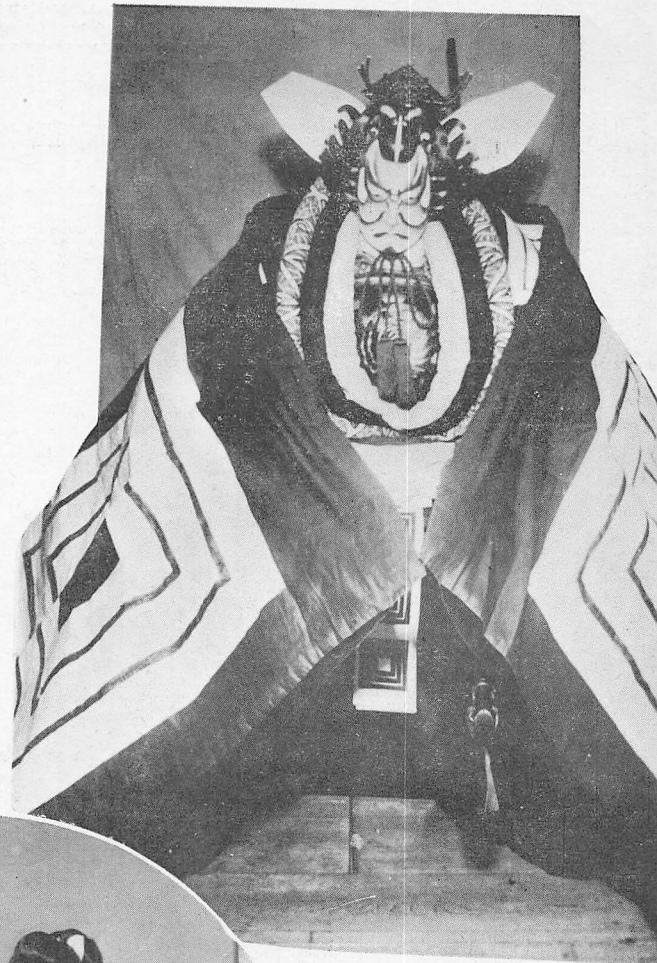
東 西 花 形 大 歌 舞 伎

中 座



右 上 勘 彌 の お 祭 佐 七
 左 上 我 當 の 將 軍 源 頼 家
 中 成 太 郎 の お 早
 下 // 江 戸 育 お 祭 佐 七 // の 舞 臺 面





右
// 暫 //

長十郎の鎌倉権五郎景政

下
// 百太郎騒ぎ // の

翫右衛門の百太郎と

芳三郎の吾野屋娘お米



創立六周年記念第十一道頓堀進出

前進座特別大興行

・ 浪 花 座 ・

保険に慈愛を込めて

可愛い御子様方の爲に
生命保険に御加入下さい
それは親御様方の尊い愛
の義務でございます。



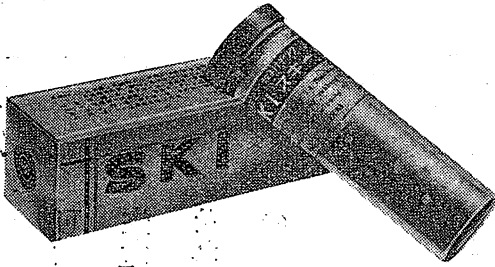
大 き く 確 て な か

日本生命

本 店 ・ 大 阪 今 橋

カユミ止
蚊よけ
チツク型

SKI
ス
キ
ー



毒虫ノ襲來ヲ防ケ

蚊、蠅、蚤、南京虫、蟻、毛虫
等嫌ナ毒虫モスキーノ使用ニ依テ完全ニ驅
逐ス

カユミヲ止メヨ

之等毒虫ノ刺スコトニ依テ起ルカユミヲ即
座ニ解消スル新劑ニシテ大人ハ勿論幼児ト
雖モ度々使用スルニ何等皮膚ヲ害セズ又發
汗ノ防害ヲモナサズ無脂肪性ナレバ感觸ヨ
ク佳香ニ富ム且掻痒部ノ搔傷ニヨリ化膿菌
ノ侵入ヲ防ギ皮膚炎ノ豫防ヲナス

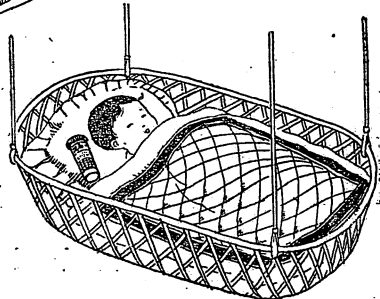
價 四 十 錢

製造販賣元

デパート藥品部・藥店ニ有リ

蚊や南京虫に

攻められて



スキーの御蔭で

スヤ〜と

大阪市東區伏見町三丁目二七

光 榮 商 會

電話北濱三三一五番
振替大阪三三一七番



上 「母なれば」の舞臺面

梅野井の智恵、笈川の喬三、小久保田の一男

下 「朱と緑」の舞臺面

中田の重役松澤、玉太郎の瀬川、瀧の千晶、

六條の豊子



關西新派劇

角座



“場香饒記功太本繪” “囁昔桶” “上口露披退引” りよ上 一座樂文一

宣傳廣告一般

三工主廣業社

道頓堀松竹座地下室
電話 南六一三一

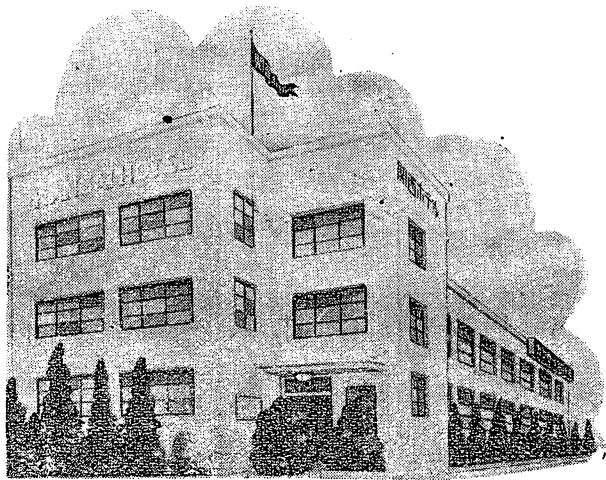
三工洋服店

気分の良(る)事北大阪一

雀麻
福壽莊

北區松原町三六
電話(北)一八七番

近代ホテルの豪華版
関西ホテル



大阪アベノ橋
市電又東

電話 天王寺
3939 3938 3930

第十二年

月刊・演劇研究・藝文
演 藝 類 編

五月號

第 二 百 二 十 八 輯

卷 頭 言

ナチスはあらゆる藝術批評を禁止し、宣傳相ゲツベルスは「藝術批評の消滅は、藝術にとつてなら損失にあらず」と斷言し、更に「藝術は指令によつて生きる」とまで極言してゐるが、藝術はそんな利害や得失や、任務義務や指令を課せられるものではなからう、殊に演劇映畫は嚴正な批判批評があつてこそ——それは職業批評定に限られたことではない——時代と共に歩み、呼吸し、人生を哲學を生み、永遠のものが創造されるのではなからうか。

——大衆のものである演劇映畫こそ大衆が沈黙のうちに偉大なる批評をし、藝術を娛しみ絶賞してゐるのではなからうか。



「百太郎騒ぎ」の目當

長谷川 伸

「百太郎騒ぎ」二幕は、私の持つてゐる目的の一つに、近づいて行く爲に、前進座上演の臺本として新作したもので、序幕は五十四枚あり、大詰は四十七枚あり、併せて九十一枚のものなるが、從來、歌舞伎系又はその傍系の上演では、一枚一分時間とおほよそ抑へる故、鐵道用語みたいなれど、九十一分時間をこれは要する勘定と、先づなるものなのである。

しかし、作者は五十四枚の序幕より、四十七枚の大詰の方が、所要時間多かるべしとしてゐる。

それは大詰の方にこそ、もつとも多く、演出演技の領分を要意したつもりなればである。

劇曲とその實演とは、まことに、不思議なこと、の多きものにて、讀んで輕んぜられたるものが、立體になつてみると、輕んじたものが輕んじられるといふ事あり、讀んで輕んじた如く、實演して輕んじたることを確めることあり、讀んで敬服して演つて輕んずることあり。まことに、判定に困難なるものである。

「百太郎騒ぎ」の如きも、目的の半分なるウケる



といふ事は、判定を作者だけは付けておれど、さて立體となつてみて、果して然るや否や判らぬのである。

前に私は「目的の二ツに」といつてゐるが、それは作者がたゞ二ツ持つてゐる目的にといふではなくして、幾つも持つてゐる目的のうちの二ツにといふ義である。「百太郎騒ぎ」はウケる事を半分の目的とし、演技を思ふだけ振り得るといふが、残る半分の目的なのである。

殊に前進座のやうに苦難を越えつつ往く劇團にウケる芝居のなき事は、肥料を忘れたる耕作物と同じな事なのである。

と、云つて『百太郎騒ぎ』が、収入といふ肥料に成つてくれ、ばいいが、作者として責任からこれを甚しく心配ごとくしてゐる。

目的の半分である、演技を思ふさま振ふといふこと、これは私に判つてゐる。確に振へるのである。その判定がつかぬやうには、ウケる實演臺本を目的のうちの二ツに思ひたてないのである。

序ながらこの劇曲は股旅物である、何もさう断はることもないのだが、私のいふ股旅物といふのと、人がいふ股旅物と違つてきてゐるので、さう断はつてみたまでである。親分、盗賊、さういふ主人公を扱つたものを、私に於ては股旅物にては非ざるものなのである。

話の順序が逆になつたれど、この本の中にある扱ひ方は、竹本を扱きたれど竹本入りの世話物と同じきが如き物といつていゝ扱ひ方になつてゐる。即ち竹本を抜いてしまひて、竹本入りの芝居のもつものと同じきものが、どこまで、私でやれるかが私に私が課したものなのである。

この種の自ら課し自ら答へたものを、尙三四作した後で、より進むか別に途を拓かうとするかが私に來る筈である。





梅玉歌右衛門

西尾福三郎

早合點してはいけない、こゝで高砂家梅玉と成駒家歌右衛門の事を書かうとするのではない。

これは今回中村會の人達によつて百年忌の追善を催される御本尊三代目中村歌右衛門の事である。

初代中村歌右衛門は加賀の金澤生れである所から家號を加賀家と云つてゐた。だから今回追善を催される三代目迄の歌右衛門は代々加賀家と稱し、成駒家と呼ぶやうになつたのは四代目以後の事である。

金澤の大關俊庵と云ふ醫師の息子が中年から役者になつて田舎廻りをしてゐる内に手蔓があつて憧れの京の檜舞臺を踏む事になつた。それから段々出世して、大阪の芝居や遠く江戸の舞臺に迄進出してつひに三都を通じての名優と稱されるやうになつてしまつた。役所は實惡、つまり國崩しと云つた

風の大敵役がうまかつたらしい。

弟子の中村東藏に三代目歌右衛門の名を譲つてからは隱居名を加賀家歌七と稱してゐた。然るにこの二代目が事情あつて途中から歌右衛門の名を返上して元の名に返つてしまつたので、當時十七歳だつた初代の實子福之助が三代目歌右衛門の名を襲ふ事になつた。安永から天保へかけての時代でこの人が俳名を梅玉或は芝翫と呼んでゐた所から、梅玉歌右衛門と呼ばれ、又芝翫の初代として「芝翫奴」「芝翫限」「芝翫香」「芝翫隨筆」等とその名を永く謳はれるやうになつた。

賣り家と唐様で書く三代目、と云ふ川柳があるが、四代目に到つて加賀家から成駒家に名を變へたのは決して家を賣つたのではなく、まして當三代目は系譜の上では三世でも事實は第二世なのである。唐様は上手であつたかどうか知らない

が、恐らく唐様並に藝は確かに初代二代目以上に出藍の譽が高かつた。

非常に藝の間の廣い人で、敵役、立役、女形を兼ね、時節物によく、世話物もうまく、更に所作事が得意であつた。

時代物では鎌倉山の荒次郎と兵衛、逆櫓の樋口、忠臣蔵の由良の助、師直、勘平、義平、菅原の相丞、時平、宿彌、白太夫、千代、玄蕃、その他、石切の梶原、千本櫻の忠信、山門の五右衛門、宅兵衛上使、吃又、熊谷。

世話物では千本櫻の權太、鎌腹の彌作、伊勢音頭の貢、妻八の八郎兵衛、三勝半七。

所作事では七變化、道成寺、五斗、靱猿、辰駕。女形では石田局、姫山姥、重の井。

その他滑稽物では乳貫ひの四郎二郎、雁のたよりの五郎七とんくの三吉、堤、畑の十作等々數へてくると、何の事はない、現在の歌右衛門、吉右衛門、梅玉、魁車、延若、菊五郎等の役所を一人で占領したやうなおつそろしく範圍の廣い藝を持つた人だつたらしい。

九代目團十郎がああやうに傑出した役者になれたのも、實はこの三代目梅玉歌右衛門に私淑してゐたからだときへ云はれてゐる。

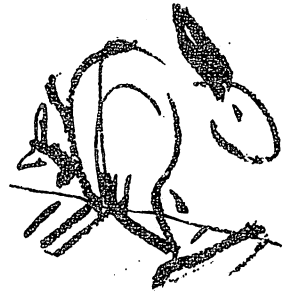
とにかく器用な人であつたらしい。上述のやうに舞臺上で

は凡ゆる役を悉く自家薬簡中の物とする一方、日常生活は豪奢を極めたもので、時に筆を採つては小唄を物して流行界に輝し故人の戯曲に加筆しては之を自分の舞臺に活用してゐると云つた風で到る所可ならざるはなき達人の風格があつた。

父の生地金澤と、俳名梅玉とに因んで金澤竜玉と云ふ筆名で物した戯曲が今日も猶舊稿現存してゐる中で、現延若得意の軽い世話物『乳貫ひ』は天保四年正月に大阪の角座で、又『雁のたより』は天保元年正月同じく角座で、何れも自作自演で大好評を博してゐる。

その他、今回追善狂言の中に選ばれてゐる近松原作の與作重の井の小室節の改作戀女房染分手綱を更らに改作したけいせい染分手綱の中のとんくの三吉を、矢張り自作自演で文政五年中座の正月芝居に興行してゐる。

梅玉歌右衛門はとにかく中村家累代を通じて傑出した俳優であつた。音羽家の五代目、高麗家の五代目、成田家の九代目等と共に劇壇史上に大きな足跡を残した偉大な名優である。今日の劇界を通じて質量共に最も重きをなしてゐるのは中村系の俳優である。これを機會にさうした人達を一堂に集めて中村系綜合展と云つた舞臺藝術の集大成を展覧させる事は有意義であるが、更らに望むべくは、この際古來からの中村系特有の芝居と云つたやうなものを數多く並べて觀せて貰ひたかつた。



歌右衛門の習作時代

森 ぼ の ぼ

歌右衛門が大阪歌舞伎座の脚光を浴びることになったのは、夢のやうな本當の話であるから驚く。何は兎もあれ、近來愉快な出來事である。

歌右衛門の今度の出し物は、春日の局と糺倉の淀君と聞くが、その「糺倉」——といふより「孤城落月」が始めて東京座に上演された頃——明治三十九年三月——は劇壇の動きの最も目ざましい時代で、近松研究劇があり、翻譯劇があり、名小説の脚色があり、大家の創作劇の上演、歌劇、詩劇の發表、文藝協會の創始、新舊俳優の競演、若手役者の進出とお互ひが大童になつて入り亂れてゐたのである。

まだ芝翫であつた歌右衛門は、今と違つて活躍も出來たので、その當時『二十四孝』の『狐火』のクルヒを出してゐた

のでも知れる。一番目も老で行く家康を避けて、秀忠で行くことにしたので、大分非難されたが、つまりそれ程まだ若いのでゐたのである。その初演の時の秀頼は現幸四郎の高麗藏千姫が先代宗之助、修理が先代訥子、内膳が先代猿之助、正榮尼が故新十郎、響庭の局が故芳三郎、大藏が故翫助——かう數へると、初演當時の現存者は淀君の歌右衛門、秀頼の幸四郎の二人だけとは、甚だ心寂しい。

この「糺倉」は前月に文藝協會の發會式があつて、その時に雅劇（みやびわざをぎ）の『妹山背山』や『新曲浦嶋』の節附披露等と同時に上演されたので、既に坪内博士の『桐一葉』『牧の方』を前年、前々年に演じて好評を博した芝翫がそれに刺激されて、競演の意氣で上場したのである。



洋酒・食料品・罐詰問屋

株式會社 横山商店

大阪市東區豊後町三番地

電話東94代表三八六五番
振番口座大阪二八四七番

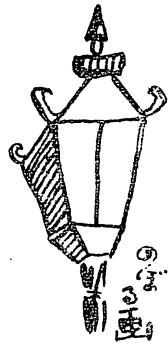
創業明治五年

競演といへば、「桐一葉」を上演した三十七年の秋に、芝翫、高麗藏のコンビで『不如歸』を出したのを手始めに、「乳姉妹」や「己が罪」を新派に挑戦的に出してゐる。兩優の滿々たる潮氣を藏してゐたことが推測されやう。不幸にして私は兩優の新派物の印象が甚だ薄いのが、「桐一葉」や「孤城落月」の淀君や「牧の方」には、かなり感銘の深いものがあつた。殊に「櫛倉」の淀君の狂態を描寫して行く力強い演技には全く魅せられたのであつた。

「春日局」はその翌年の春で、其時の中幕の「勸進帳」の

義經と共に初演ではなかつたかと思はれる。これは團十郎の春日ノ局を見た人達にはかなり不滿なものがあつたやうである。私も春日局よりも、同じ正月に演じた「女誓」の方をすつと面白く見物した。あの花道の長いツラネなど今も耳の底に残つてゐる氣がする。

今から考へると、前述通り三十七年から四十年頃の、謂はゞ習作時代の芝翫、高麗藏の芝居が、一番野心もあり熱もあつて、引きつけられるものがあつたやうに思ふ。



俊寛と松浦

菱田正男

五月の關西劇壇を飾る豪華版興行は大坂歌舞伎座に開かれる三世歌右衛門百年祭記念の東西合同大歌舞伎であらう。

昨年結ばれた歌右衛門、吉右衛門らを中心とする、ク中村會の東西精銳總動員といつた形の興行だけにたしかに近頃の觀物にちがひない、歌右衛門も十餘年ぶりで關西の好劇家に見えるわけだし、昨秋東京で開かれた三世歌右衛門百年祭の時のやうに好成績に終ることを祈つてゐる。

ところでこの舊行で吉右衛門が晝に「俊寛」と夜に「松浦の太鼓」を出す。この二つとも秀山十種の内にあつて播磨家の當り藝として知られてゐるものであり、よく出るが、然し吉右衛門の力演と相俟つてその都度見物を喜ばせてゐる狂言である。「俊寛」は最近では昭和九年の京都南座の顔見世と現四月の東京歌舞伎座の團菊祭に出てをり、「松浦」の方は昭和八年の京都の顔見世、昭和十年九月の神戸松竹劇場に上演されてゐる。

「俊寛」はク平家女護島といひ、近松門左衛門の作、享保四年八月に大阪竹本座のあやつりに上せられた。これは重衡の南都攻めから、鬼界ヶ島の流人、清盛の病死、常磐御前らの艱難に、宗清の情け、頼朝の旗擧げまでを脚色した狂言であるが「鬼界ヶ島」の段は謡曲のク俊寛クに據つたものらしい。このク鬼界ヶ島の段クだけ歌舞伎に移されて、明和元年九月、江戸中村座で市川海老蔵十回忌に上場された。俊寛は三代目團藏、千鳥は松江、更に天保五年九月に中村座で出て五代目團藏の俊寛、玉三郎の千鳥、駒次郎の成經、當十郎の康頼、團三郎の丹左衛門、芝十郎の瀬尾十郎といふ配役であつたが、とにかく俊寛は代々の市川團藏の當り藝とされてゐたもので、當代では吉右衛門のものである。

筋は平家を亡ぼさうとする陰謀が露見して成經、康頼、俊寛の三人は鬼界ヶ島に流されてゐる、ところへ一日都から瀬尾十郎と丹左衛門とが赦免状を持つて到着した。それには二

人あつて俊寛の名が洩れてゐたが、小松内府の計らひで三人とも歸れることになる。このうち成經には島で契つた蟹の千鳥がある。ところが瀬尾は何といつても千鳥を成經と共に船へ來せやうとせない、その上瀬尾は都で俊寛の御臺東屋が清盛の意に叛いたため悲劫の死を見たことや一子徳壽丸の行衛の知れないことなぞ俊寛一門の離散の次第を語り聞かせて罵倒する、そこで俊寛は都へ歸る望みも失せ、千鳥を自分の代りに都へと頼むがそれも背き入れられぬので怒つて瀬尾の差添引き抜きその場に瀬尾を斬り倒してしまひ、成經、康頼千鳥らを船へ乗せ、上使を討つた咎で再び鬼界ヶ島の流人になる決意し、去り行く船に名残を惜しむ

といふもので、この間の吉右衛門の俊寛の力演は實に結構なもので、殊に去り行く船に別れを惜しむくだりや、巖上に攀ぢ登り、悲盡な面持で船を見送るあの幕切れはこの人獨特の味を充分に生かしていつ見ても感激さされる。全く當代一の俊寛役者である。千鳥の時藏も近年ますます圓熟して來たし、それに見のがせぬのは友右衛門の瀬尾の巧さである。今度もこの三人が演じる「鬼界ヶ島」だけに、好劇家にとつてはまたも恵まれた機會といふべきである。

次に「松浦の太鼓」だが、これは安政三年正月江戸森田座に上演された「新舞臺いろは書初」が原本で、作者は瀬川如

皐、その十一段目がこれに當り、初演の配役は當時の三津五郎の松倉綠翁、同友右衛門の其角、同男女藏の大高源吾で、兩國の大高の笹賣りから松浦邸まである。この松倉綠翁が松浦侯になる、のち明治十五年正月これが勝彦藏によつて加筆されて、大阪角座に上演されたのが、「誠忠義臣元祿歌舞伎」といひ、松浦侯の併席と討入の亂闘を一場置きに廻して見せた。これが今日の「松浦の太鼓」の先驅といふべく、故歌六の當り藝であつた。現在では歌六の血を受けた吉右衛門の十八番物とされ、やはりク秀山十種クの一つである。この芝居は故鷹治郎がよく演つた玩齋樓十二曲のク土屋主税クと同巧異曲とされてゐるが、ク土屋主税クの方は赤穂浪士が本懐を遂げるであらうことを豫期してゐるだけ興も薄いが「松浦の太鼓」の方は松浦鎮信が赤穂浪士の腑甲斐なきを、さんく罵倒してゐる時間える山鹿流の陣太鼓で快舉を覺る仕組みになつてゐるので、所謂見せ場があつてこの方が面白い、といふ人もあり、土屋の方はいかにも肚のある殿様だが、松浦の方は、其角が定紋入りの羽織を大高に與へたといつて家柄を盾にとつて毒づいたり、大高の妹ゆへに暇を出したり、すべてに氣が小さくコセクすると批難する向もある。兩説の批判はさておいて、この狂言の筋は「兩國橋の笹賣」「本所松浦邸」「同表玄關の場」と三景になつてをり、時間の都

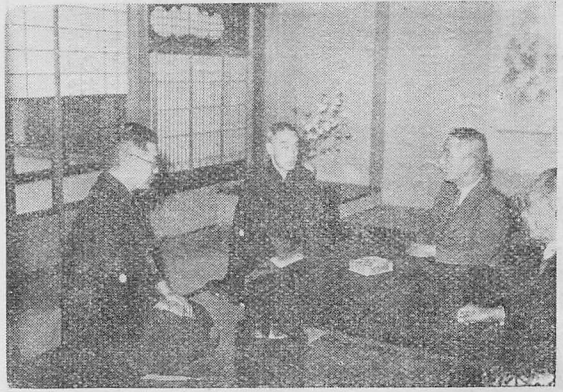
合で兩國橋の條は省かれることもある。

雪の兩國橋で大高源吾は寶井其角と會ふ。其角は大高の浪々の哀れな姿に同情し、松浦侯から拜領の羽織を與へ、身の振り方などを語り合ひ、別れ際に「年の瀬や、水の流れと人の身は」と吟み、附句を頼むと、源吾は「あした待たるその寶船」とつけて別れる。

第二場の松浦鎮信侯の邸では俳諧の催しの最中、「影となり、日向ともなる庭の花」と侯の句に、其角が「祿を盗まぬ鶯の聲」とつけるので侯は上機嫌であつたが、侍女のおぬいが大高源吾の妹なので、つね／＼赤穂浪士が復讐せぬのに腑甲斐なく思つてゐた侯は、所謂坊主憎けりや袈裟までの警の如く、おぬいに當る、其角はいろ／＼取りなしたあと、昨夜大高と會ひ羽織を與へたことを話すと侯は大いに怒り其角の粗忽を責め早々おぬいを其角に引きとらせ、その上家來に浪士のことを罵倒する。其角とおぬいが泣く／＼引き退がらうとすると、侯はさつき其角の話の大高のつけ句「あした待たる、其の寶船」を思ひ出し、その意味を知らうと考へる途端に聞こえる菱々たる太鼓の音、耳にした候は山鹿流の陣太鼓と知り、赤穂浪士の快擧を覺つて喜ぶ。其角、おぬいを許し、大石とは山鹿素行の同門の誼みで助太刀すると勇み立つ。

玄關口では、侯が物々しい装束に身を堅めて馬に乗り、家臣の制止も肯かず乗出さうとするところへ、大高源吾が本望成就の報告と御禮言上によつてくる。侯は物語を聞き馬から轉げ落ちるほど喜び、義士の忠節に武士の鑑と賞めそやし、「淺野侯はいゝ家來を持つて仕合せだ」と羨やみ大高は大いに面目を施す――

と、いつたもので、大向ふの喝采を浴びるやうに出來てゐる。殊に太鼓を聞くくんだりが面白い、小刀を左手に耳を澄ませ、太鼓の音に指をくり、山鹿流の陣太鼓と知つて、岡部、松浦、千坂、大石と四人の山鹿流の秘傳會得者と思ひ出し、大石と知つて狂喜するあたりは、吉右衛門の熱演と相俟つて胸を躍らせる。それに玄關先で、淺野侯を羨やみ、義士の誠忠を讃へるあの名調子が、わけもなく播磨家のファンを引きつける。此優に打つてつけの狂言である。おぬいはいま東寶へ行つてゐるもしほがよく演じ、其角、源吾の兩役ともいゝんな人を見たが、吉右衛門の松浦はいつ見てもいゝ。歌右衛門祭に吉右衛門の演し物としては「またか」の譏はあつても、この優の手に入つた狂言としてこの二つの芝居を見ることは決してわるくないと思ふ。



白井邸の 劇的シーン

昨廿九日午后正法寺で営まれた三代目歌右衛門（初代梅玉）の百年追善法要の式場、東西梨園のオール中村系を網羅した顔觸れの中へ梅玉に随つて参列した一人の珍らしい顔、それは昨年八月松竹を去つて東寶へ奔つた中村

福助、當時梅玉より勸當を宣告され、自來約一ヶ年、親と子であり乍ら、顔すら合はず事はなかつたが、此度の初代梅玉追善興行には是非列らねばならぬ直系の一人だけに、「東寶さへよければ口上へ出てよい」と白井松竹前會長は寛大な氣持ちを表明してゐたが、同日午前、東京よりの歸途、京都松竹座燒失の報を京都驛に出迎へた社員から聞いた白井氏は直ちに京極に駆けつけ白井（信）副社長らと前後策を講じ、自動車飛ばして笠屋町の白井邸に着くなり多忙の中を、梅玉福助を招き、「若い者が他流試合に出る事は悪い事だとは思つて居ないし、決して止めはしない、君の場合は松竹から離れる時の手續きに少し落度があつた、しかし將來ある君が勸當と云ふ肩身のせまい思ひ出でゐるのは梅玉さんも父としても見てゐられないだらう、これからはどう、道頓堀へも出入して先輩諸優に習ふべきは教つたらよい君が他へ行つた事と父と子の問題は別だ「親に孝」は日本人最大の道徳

だ、お父さんも許してやつて下さい」と、梅玉の氣持を察したとりなして、條理を盡して説くところあり、梅玉も「社長が斯う云つて下さるのに、私としては有難うと申上げる外言葉はございません」と、勸當を許し、福助も白井氏の大腹中に感泣、父梅玉が芹屋の白井邸より取り寄せて呉れた紋服を着し約一年振り父子相携へて法要の席に参列したのでつた、白井氏のこの情の籠つたとりなしては、法要の席でも話題となり社長の温情に眼をしばたゞく者すらあつた。

繁華街に近く、交通至便

閑雅な和洋室！

◇モタン階上浴室新設◇

南地ホニヤ

南地戎橋電停前

電話南四一四・四四一

一宿 三圓
二圓 半額
一圓 半額

三世中村歌右衛門略傳

紙魚庵

稀代の名優梅玉中村歌右衛門は、元祖歌右衛門の實子で、安永七年生。幼名を福之助と云ひ、また市兵衛とも云つた。父は彼の俳優たることを好まなかつたが、自ら子供芝居に投じて好評かつたが、自ら子供芝居に投じて好評噴々。年長者をして燈若たらしめることも度々だつたので、父も遂に其の志望を許したのであつた。

寛政三年十月(十四歳)父を失ひ、四年後の同六年十一月(十七歳)三代目中村歌右衛門を襲名し、同時に在來出動して居た小芝居を退き、始めて大

芝居へ現れ、

「敵役も立役も、女形も所作事も年若に似合はぬ小手の利いた事。其中に氣持高く、狂言も仕つめずに、さらりと流す場もあつて、きつと頼母しい」と激賞せられた。

文化五年三月(三十一歳)江戸中村座に現れ、これを江戸の初お目見得に前後三回、八年間を江戸に過し、江戸俳優を顔色なからしめ、非常な喝采と名譽を負つたのである。

文政八年(四十九歳)の頃、彼は屢々病魔に犯され舞臺も休み勝ちであつたので、意を決し一世一代を披露して隠退する心算でゐたが、其の後病氣も全快したので、再び舞臺を勤める事となり、天保六年冬(五十八歳)自ら玉助と改名し、四代目歌右衛門の名を門人二世芝翫に譲り、天保九年四月大阪中の芝居で「刈萱」に新洞左衛門、紅梅靱」に梶原に扮し、これを名残りに病を得て、其の年七月十三日終に黄泉の客となつたのである。享年六十一歳

辭世は「南無さらば妙法蓮華經かざり」
 彼は體軀矮小で、容貌悪しく、且口
 跡しやがれ、折々含み聲であつたが、
 辯舌は爽かで、藝才は無類と稱讃され
 たと古い記録に残つてゐるから、其の
 缺點を忘れしむるまでに、觀客を魅す

御觀劇には特に



新發賣 鶏せんべい を
 御推奨申します
 飄亭食品

〇ニ 一 共料送 入罐美優

る腕があつたと考へてよい。

藝風は善悪、男女、時代世話、所作
 事等何一つとして行くとして可ならざ
 るはなき名手で、特に『忠臣蔵』や『
 菅原』の七役、九役、或ひは所作事の
 七變化、九變化等の如く、同時に雑多

の役を演ずるのを得意とし、尙舞臺以
 外では淨瑠璃にも堪能で、音楽にも練
 達し、『琴責』の阿古屋に扮して三曲
 を演じて屢々世人を感嘆さしたと云ふ
 ことだ。

俳名は始め芝翫と云つたが、後に梅
 玉と改めた。

彼はまた頗る傲慢尊大な氣性で、種
 々世人に憎まれたが毫も意に止めず、
 其の生活も豪華を極め、一家の男女三
 十人、他に別宅三戸を有し、一ケ年の
 生活費凡三千兩。

當時大阪では
 「高麗橋の大丸か中村梅玉か」
 と云はれた程だと云ふことが、今も語
 り草として傳つてゐる。

× × × ×

シリウタオネカニ核結

…科病柳花…

院医原藤

★番六三六二 戎話電 ★ 入西側ノ溝筋橋戎 ★

シリウタオネカニ核結

俊寛 淀君 暫

大橋孝一郎

A 俊寛

私は生來が感激性に乏しいといふのか
神經が鈍いといふのか、その何れに屬
するかは判らないが、鬼に角、今迄に
餘り芝居を見て泣き出したといふ例し
を知らない。

然るに、そういふ無感受性な僕でも
ハツキリ云ふが吉右衛門だけには、き
れいに二回泣かされた經驗を持つてゐ
る。その一つは「二條城の清正」であ
り、今一つは今度歌舞伎座で上演され
る「俊寛」なのである。

「二條城の清正」は御承知の如く吉田
絃二郎氏の新作で、この方は脚本から
して既に現代の適合した悲劇の台詞で
書かれて居るので、たとへ此の作者特
有のセンチメンタリズムな臭ひが隨所

に漲つてゐるとは申せ、此の場合の清
正の氣持は溶け込んで、一掬の涙を禁
じ得ないのは、一應領ける節もあるが
「俊寛」の方は純然たる古劇であり、
随分現代人とは縁遠い物語りであり乍
ら、觀るものゝ肺腑を剝らすにはをれ
ないのは何故か。即ち、吉右衛門の持
つあらゆる能力が、此の狂言ではその
極致を究め、氣魄は炎と燃えたとされて
私達の肉體に迫り、しめつける爲であ
らう。而も彼は己が藝風をかくの如く
高度に發揚する一方、此の古劇をして
單なる古劇に終始せしめず、院本の人
物に新しき時代の臭味を吹き込んで、
人間俊寛の姿を縦横に活寫し盡し、近
代劇の境域にまで引上げて行く手腕に
至つては、實に敬服讚嘆の藝域に到達

したものと云へやう。
纜にひかれ離れて船を追ひながら嘖々たる巖上によち登つて行く……そして客席を大海原に見立て、一刻一刻と遠ざかり行く船を見送り乍ら、絶望に怒號する俊寛の姿に、我達も、あはれ涙滂沱として止まるところを知らないであらう。

私は此の狂言を以て吉右衛門最高の當り役に推すに躊躇はしない。

B 淀 君

私は残念だが體の不自由でなかつた時代の歌右衛門を知らない。私が知つてからの歌右衛門は、既に立て立てる歌右衛門であつたのだ。芝居を全く知らなかつた私が、初めて歌右衛門の舞臺を見た時は、丈の立居が全く不可能であることを全然耳にしてはゐなかつた。狂言は「白石斬」の揚屋の場で歌右衛門の宮城野たつた。勿論見てゐる間にも何等の不自然をも感じなかつ

たし、それどころか、あの情味のある女形の豊かな美しさに陶醉し切つてゐたので、丈の立居が不自由だなどにはさらさら夢にも考へ及ばなかつた位であつた。それから後になつて、丈の體の不自由なことを初めて知つて、私は耳を疑ぐる程に驚かされたのである。

しかし成程そう聞かされたから考へてみると、演出上に思ひ當ることが幾つもあったが、決して歌右衛門天稟の品位や美しさを損なうものではない事を知つて流石に名優だと感嘆し、また安心もした次第であつた。

最近では昨年の團菊祭に「樓門」の五右衛門を見たが、あの豪壯な舞臺に君臨する歌右衛門の風格は、堂々歌舞伎座を威壓して、なほ餘りある物凄まじい偉觀であつた。幕切れ朱塗の欄干に片足をかけて、クワツと兩眼を見開いて見得を切つた瞬間の大まかな味、私は生涯もう決してあの様な大舞臺に

は接しられないだらうと思つてゐる位である。

然し、歌右衛門全生涯中での逸品は申す迄もなく淀君であるが、私は歌右衛門の淀君に就いては全く白紙でもあり、また今後その舞臺に接しらるゝとは夢にも豫期してはゐなかつただけに今度の來演に「糶庫」が出ると聞かされた時の喜びは非常なものであつた。勿論あの不自由な體軀で、昔日の如き完璧の淀君を務め得るとは決して私は考へないが、不自由な體軀を殺して、どの様な演出で、どの程度までの芝居を見せ得るかと云ふ點に、私の歌右衛門の淀君に對する絶大の興味が懸つてゐるのである。

C 暫

前進座では長十郎が「暫」を演るが歌舞伎の世界で最も神聖視されて來た歌舞伎十八番も、近頃のやうに、かうあちらでもこちらでも簡単に上演出来るやうになつては、もう有難くも何と

もない。しかしそれだけ歌舞伎がボビユラーになつたと云ふなら、私はかうした傾向は大賛成だ。だが「暫」と云ふ活人畫舞臺が、果してどの程度まで大衆に受入れられてゐるか云ふことは問題だ。此れに就いては何れ稿を改めて書くとして、長十郎の「暫」は、「勸進帳」以上によき出来だらうことは想像出来る。それは「暫」は「勸進帳」の如く舞踊劇ではなく、純粹なる荒事一筋で押切つて行けるからである。此の點、長十郎は當を得た俳優と云ふことが出来る。然し、かゝる狂言では他愛もない僅かな動作のみしか與へられてゐない端役どころまで、一通り名のある役者の顔がズラリツと舞臺に居並んでゐなければ面白くないものだ。その點で前進座の「暫」は喰足りないものがあるかも知れない。だがそれも今は云はずに置かう。只、私は長十郎の権五郎景政に期待をかけやう。

(四月二十五日)

御 觀 劇 には



芝居の切符はフレイガイドでお求め下さいませのが一番お徳で御座いますお場席もよろしいし一枚の切符でもすぐお届けいたしますことに團體にて大ぜい様御觀劇の場合は特別にお安く相談いたします。

フレイガイド觀劇會

月組新會員募集中

月額 金壹圓也

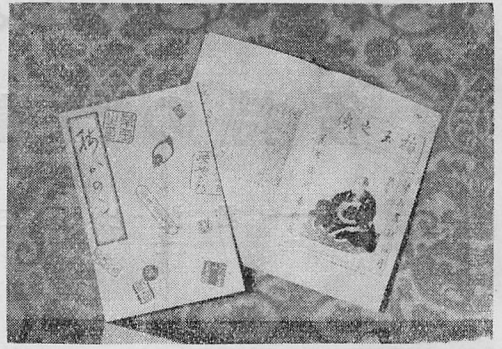
詳細は當店へ

御一報次第フレイガイド月報御粗呈致します。

北濱(23) 三三三〇九
三五九九三番

大阪渡邊橋 朝日ビル階一

フレイガイドの御利用



このか梅

和綴、装釘は傳記の主初代梅玉が用ひし華印をちらし、口繪に豊國筆歌右衛門の七變化の内「朱鐘鬼」、「梅玉の像」、「書簡」等の寫眞を収録、本文はその父母や子供時代から、江戸下り、珍訴訟など種々の挿話や、山陽などとの交友や關係晩年の活躍の詳細を記し、卷末にその子孫と門葉迄に筆を及ぼした美本である。

三代歌右衛門に因む

遺品展観

大阪に生れ大阪で育ち素晴らしい人氣俳優として京都江戸大阪の三ヶ津を風靡し藝境の深く且つ廣い事を百年後の現劇壇に於いても常に賞揚されてゐる三世歌右衛門（初代梅玉）の百年追善記念興行が歌舞伎座に開演されるに因み、松竹前會長白井松次郎氏は吾が大阪劇壇の大先考である三代歌右衛門を一層深く認識するしるべとして文學博士伊原青々園氏述の傳記題して「梅かのこ」を發刊した、菊版

五月の歌舞伎座は三代中村歌右衛門（初代梅玉）百年追善記念興行東西合同大歌舞伎で中村歌右衛門の一世一代の「春日局」と「繡庫」など呼物澤山で大はりきりにはりきり、連日満員だが大阪が生んだ稀代の名優三代歌右衛門の遺品を同座五階會場で展観中、三代歌右衛門が就納したといふ「娘道成寺」の繪姿豊國描くところの名畫を始め、軸物、古番附、錦繪（何れも三代歌右衛門似顔）故中村鴈治郎所藏の四代歌右衛門の座像、吉右衛門

出品の靱彦畫伯の三代畫像など、古今の珍品を網羅して幕間の一時に一入の興を添へてゐる。

慕追父亡

扇雀の

臺詞

「引窓の涙」

中座の東西花形劇ひるの部「引窓」は道頓堀では鴈治郎似來のだし物扇雀の十次兵衛、小太夫の長五郎、成太郎のお早、秀郎の母の好配役で満場を唸らせてゐるが、十次兵衛が武士に取立てられた喜びを母に話すところで、流石は扇雀、少つと居づまるを改めて「これも亡くなりましたした親父様のおかげ」と科白に籠めた父鴈治郎追慕の一ト言が大いに觀客の同情を呼び棧敷や椅子のアチコチでハンカチの勤く事／＼奥役の大川老人まで他を振返つて「やられた」と眼頭をふいてゐた。

（初目所見）

歌右衛門の持役

— 春 日 局 と 淀 君 —

山 川 瞭

劇壇の大御所成駒屋歌右衛門が七十餘歳の高齢で、しかもその不自由な身を提けての久々の來阪は、好劇家諸君にとつては思ひもまうけなかつた來演だけに、一入その嬉びと期待とは大きなものがあることと思はれる。

優の持役は御承知の通り「淀君」と「春日局」の二役で、共に自家藥籠中でも嚴選に嚴選を重ねた白眉品なることは云はずもがな。私達は久し振りに同優の持つ天下無敵の貫祿ある舞臺を心行く迄満喫したいと思つてゐる。

それ迄に、次に各狂言の筋書と解題藝談等を御紹介して、御觀劇のガイドとしやう。

「春日局」は福地櫻痴氏が團十郎の爲に、明治二十四年六月に書下した狂言で、初演の時は團十郎が、春日局と家康との二役を勤めたのであつた。全

篇は四幕ものだが、此の度は時間の都合で、最も華麗な大詰のお黒書院の場が上演されるのである。その筋書と云ふのは――

元和元年二月の或る日、その日は丁度、二代將軍の姫君和姫さまの御婚儀のお喜びのある日だつた。先づお式奉行を承る人々、土井大炊、松平右衛門太夫、本多上野介、青山伯耆守等席順に控へ、上座には將軍家、御臺所、和姫、すこし下つて春日局が肅然と座をかまへてゐる。扱これにて幕が開くと皆々一通り御祝詞を申述べ、將軍家の御挨拶なぞがある。ところへ番頭の稲葉丹後守が登場して、母である春日局の側へ近寄り、弟の七之丞、内記兩名のものが父の手紙を持参したことを報告する。

お式奉行の人々は、それを聞くと、

これへ通す様にと命ずる。春日局は恐れ多いと辭退するが、是非と云はれて二人の子供を案内させる。

持参した手紙を見ると良人佐渡守から届けられたもので、文面には「妻の手柄で出世したと噂されては苦しいから離縁する」と云ふ意味のことが書きしるしてあつた。

これを讀んだ春日局は、場所がらを忘れて泣き悲むので、一同も不審に思ひ、將軍秀忠公もその手紙を見せよと文面を讀まれると、右の次第だつたので、將軍も「流石は佐渡守だ」と感心する。

春日局は良人に貞實ならんとすれば君に忠ならず、君に忠ならんとすれば良人に貞實ならず、思ひ惑ふて、遂にお暇の願ひを申出でる。秀忠公は、「いやそれには及ばぬ、今こそ其方に一人の大名を逢はする」と謎の様なことを云ひ、家來に合圖に

し招じ入れた人の姿を見ると、それは疑ふ方なき良人佐渡守の姿ではないか然も眞岡の城主として二萬石を頂戴する身上になつたのだと云ふ。また、春日局自身も御母代として二位に叙せられ、子供達もそれぞれに任官をした有難い君の御説に、局は只感涙に咽ぶばかりだつた。そして、目出度く姫様御婚儀の晴れの日の喜びを舞臺一パイにたゝえて、靜かに此の幕は降りて行くのである。

歌右衛門の春日局は、全て團十郎の型を踏襲した行き方で、これは明治三十六年五月に團十郎が上演した時、歌右衛門がお梶の局を勤め、その時覺え込んだ型を骨子として、從來數回となく上演して來たのであつた。但し近年身體の自由が利かなくなつてからは餘程演出上にも差異が出來てゐることは勿論、例へば幕切れの舞も、他の人に更らして舞はしてゐるのも、その一

例と云へやう。

「糶庫」は申すまでもなく坪内逍遙先生の名作で、長篇春手鳥狐城落月の一部をなすものである。初演は明治三十九年三月の東京座で、歌右衛門は澁君と家康との二役を勤めた。爾來數回の上演に依つて、歌右衛門の澁君は當り役でも逸品として、劇壇に燦然たる光彩を放つに至つたのだつた。

それもその筈で歌右衛門が糶庫の澁君に勞した苦心は、一通りのものではなく、幾度も足を集鴨の風癪病院へ運んで、狂人の笑ふ様、泣く様を實地見學しては研究し、殊に狂人の笑ひ聲には並々ならぬ苦心を要したことが、その藝談中にも述べられるのであるまた作者の坪内先生の此の狂言に對する熱意も非常なもので、毎日熱心に舞臺稽古に立會つては各優を指導せられたのであつた。

扱、その筋書を次ぎに紹介しやう。

見たまゝと藝談

大阪城の運命も今日を限りと血戦恰も鬨、關東方へ内通してゐる大住與左衛門は人質の千姫を關東へ落さんものと城に火を放つた……折からの暴風、炎はたちまち八方に燃え廣がり、さしもの名城も今は灰燼に化さうとしてゐる……與左衛門は梶の葉の間に手を引かれた千姫とめぐり逢つて、一時も早く、此の場から落ちのび様とする。

火焰はなほも暴風に吹きあふられて既に天守閣へも炎上したので、今は御座所は山里の糶庫に移されることになつた。高麗紗の幔幾ひらか積み重ね、これを淀君の假御所に充て、うしろには桃山式の金屏風、淀君は怒り狂ひ乍ら今にもかけ出さうとする氣配であるのを、正榮尼、大藏卿、饗場の局、その他の腰元で抱き止めた。淀君は俄かに癡氣を起す。

この時大野修理亮が鎧に陣羽織のいでたちで淀君に降参の理を説くべく馳けつける。勿論淀君が修理亮の言を受け入れる筈ではないが、

「お正氣の無きを幸ひ、御方さまには御承知と申しこしらへ、ともかくも御出城のことに取計らひませう。一へにお家の爲でござる」と云つて修理亮は徳川方へ返答すべく立去つて行く。

此の時今迄平靜だつた淀君が、俄かに氣味の悪い聲で笑ひ出したのである。かと思ふと、急に泣き出す……哀れ落城の悲しさに淀君は遂に發狂したのだつた。

——不意に起上つた淀君、その血走つた眼は、全く此の世のものではなかつた。

處々に痛手を受けた氏家内膳に引連れられて此の室に來た秀頼卿は一目母

淀君の有様を見て、「淺ましや母上には、こりや御心が亂れしよな」と消然として悲歎の涙に暮れる。そして母のしどけなき様にたまり兼ねた秀頼卿は淀君の襟に手を懸け、只一突きにと佩刀の鞘まで拂つたのだ。一同は泣き喚き乍ら、それを押しとどめる。

秀頼卿は、

「父太閤の偉業をば、此の身故に滅するかと、不肖を悔ひ慚愧の涙、五臓六腑を骨もろともにしめ木にかけ、絞り出す血ぢや。ゆるせ、泣かすには居れぬわい」

と兩手で顔を掩うて泣く。その内にあつて——ひとり淀君の氣味悪い笑ひ聲そしてあらぬ方を口惜しげに眺め乍ら……何時までもその笑ひ聲は續いて行く……この情景のうちに靜かに暮は降りて行く……。

芝居見たま、

百太郎騒ぎ

浪花座前進座

(一)

文政十年夏の甚。

秩父街道吾野の宿、吾野屋と言ふ旅籠屋。

主人五左衛門の部屋では、今、武州多摩生れの旅人、連雀の百太郎を取りまき、これも旅の上州者らしい親分、石切り彌兵衛と子供の作五郎、久四郎とが、長脇差を引きつけ、憤然と睨みつけてゐる。

吾野川を後にしてゐるとは言へ、眞夏の日中は焼ける様に暑い。

五左衛門と女房おていは、娘のお米のことから、頼んで百太郎に掛合つた事件だけに、だん／＼事件が大げさに

なりさうなのでおど／＼と片隅で見ているだけであつた。

百太郎は「恩を仇」と嘲られても、卑怯者と嘲られても、もう一度お米に會ひたかつた。旅で病んで、逗留した吾野屋一家の人々に助けられ、その恩は身にしんで忘れられないが、深く言ひ交した娘お米にもう會はずに立ち去ると言ふ事は百太郎にはどうしても出来なかつた。お米ちやんを女房にして下さい。きつと働いて安樂に暮して見せますからと哀願するが、五左衛門夫婦はきつ入れないのだつた。心底打ち擴げた百太郎の直情に、夫婦は一應の同情は持つが、かへつて金が目當の彌兵衛達の憤激を買ひ、唯をど／＼するばかりであつた。

遂に、口ではかなはない彌兵衛達は腕で来いと百太郎に組みついた。組みつほぐれつ四つの軀は獸の様に相闘つた。唯事ならぬ物音に、吾野屋の番頭

はじめ風呂番、料理人等は驚いてかけつけるが手の下しやうもない。唯忙然と見てゐるだけだつた。三人の猛撃の下に苦闘しながら百太郎は叫びつづけた。「お米さんに一度會はして下さい。たつた一度で良い、吾野川をへだてゝでも、谿をへだてゝでも良い。話さへ通じれば……」と。だが彌兵衛の

一撃は、百太郎をその場へ毘倒させた。丁度その時料理人が、お米の脱出を報告に来る。お米は、藏の中へ檻禁されてゐたのだつたが、藏の二階の窓をこわし、窓から扱帯をたらし、それを下りたのだつた。彌兵衛達は慌てゝ百太郎をしぼり、押入の中へかくしてしまふ。そして半狂亂の體で入つて来たお米に、百太郎が出て行つてしまつたと言ひ、悪人である事を説き百太郎をあきらめさせやうとするが、百太郎の眞情を知つてゐるお米は承認せず、かへつて彌兵衛達の虚偽を暴くのだつた

彌兵衛達はもと／＼本心からこの仕事を引き受けたのではなかつた。百太郎の屍體を片附けると言ふ言ひがかりで五左衛門に百兩と言ふ大金を強請る驚く主人に白刃をつきつけ追ひ廻す時氣を取り返し繩ぬけをした百太郎が、押入の中から狂犬の如く飛び出した。亂闘の果、遂に百太郎は彌兵衛達三人を倒してしまふ。そこへ父親を探しながら入つて来たお米「百太郎さん！」

「もうみんな駄目になつた」百太郎には考へる力もなかつた。外には近所の人達の騒ぐ聲がきこへて来た。「どうしたら良いんだらう？」百太郎にもお米にも解らなかつた。絶望と焦躁だけが慌しく波打つた。

外の聲はだん／＼活氣を帯びて来る身の危きを知つた百太郎は、五左衛門の情あるすゝめによつて逃げやうと決心し窓の格子を斬り、何かお米に言ひ残したい焦躁も感じながらも思ひ出せず、泣きくすれるお米を後に外へ逃げた。

入れちがひに、親類の者が先頃に村の若者等大勢獲物を持つて入つて来たが、覗いたゞけで、聲を立てる者も居なかつた。

無氣味な沈黙の中に吾野川の水音と降る様な蟬の聲だけがきこえた。

その晩、吾野屋の前では、土地の者が大勢集まつて、逃げた百太郎が、吾野屋をうらんで、火でもつけに来るのではないかと、警戒してゐた。

やがて寺の鐘がけたゞましく鳴り出し、みんなそつちの方へかけて行つた。吾野屋の横から人影がして、屋根の上に這ひ上つて来た。百太郎だつた。

一目お米に會ひたかつたのだ、屋根つたいにお米の部屋の前近づき、お米を呼んだ。答がない、叩いて見た、やはり答がない。と隣りの二階窓が開いてお米が現れた。望み通り谷をへだて

／＼屋根と屋根。百太郎は、前に約束した事もあり、二人きりなら話さないと言ふ。五左衛門が聞き手に現れた。百太郎が先刻思ひ出さうとして思ひ出せなかつた事、そして今、その一言を言ひに来た事、それは「俺がゐなくつても生きてゐられるか」と言ふ事だつた。

お米は答へられなかつた。しかし「仕方ないもの、泣き／＼でも」と言ふ言葉をきいて「石を咬んでも、火を呑んでも生きてくれ」と絶叫しながら、丁度また百太郎の姿を認めて押し寄せて来た村の人達から姿を消した。村の人は唯、正丸峠へと一さんに馳けて行く馬上の人を見たゞけだつた。

(2)

嘉永四年の初夏——あれから二十年たつた。所は同じ秩父街道、吾野屋のあとが、今は江戸屋と言ふ酒と飯を賣る店と變つてゐた。店の中では伯樂、旅藝人等が飲み、食つてゐた。江戸の

香のまだ失せない主人六藏を中心に話に花が咲いてゐた。そこへ目明し狼武兵衛が、弟分の梅吉と一緒に飛びこんで来た。大捕物の伏兵である。

捕物の騒ぎがだん／＼近づいて来る。武兵衛、梅吉もとび出して行つた。やがて捕り物の聲も遠ざかり、店の人々もやつと生氣を取り返した。そして、こんな騒ぎは、二十年前の百太郎騒ぎ以來始めてだと、當時の事を話してゐるところへ、人影がさして老殘の旅博徒が雨にぬれて入つて来た。百太郎である。百太郎は、どうしても忘れられない吾野の宿へ、何十年ぶりかで訪ねたのだが、吾野屋の跡もなく、變りはてた江戸屋の内部をちろ／＼見渡すのだった。その時、裏手では、お米と百太郎の娘であるお時と六藏の妻おぶんとがつくねんと煙つてゐる雨を眺めながら話してゐた。お時は江戸吉原の遊女となつてゐたが、故郷が忘れがたく廓を足拔きにし江戸屋に滞在してゐた

のだった。この土地では悪く言はれてゐる百太郎であるが、お時にはまた會つた事もない父親であり、言ひ知れない愛情を感じ、今もおぶんに百太郎の事をきいてゐるのであつた。たつた一人になり、お時がヂーつと雨を見つめてゐる時、何處からともなく、自分の廓の名「誰袖」を呼ぶ者があつた。土藏の腰巻石の間の蕨が動いて出て来たのは木鼠の仁吉と言ふ盗人だった。仁吉は江戸吉原で垣間見たお時が忘れられずお時の後を追つたのだが、自分の舊惡もバレ、先刻からの捕り物となつたのだった。が唯一心にお時を思ひつめ、こゝまで逃れて来たのだった。言ひ寄る仁吉をお時は傳法にはねのけたが、思ひつめた仁吉は遂に暴力にうつたい様とした。その時隠から仁吉の首をしめ、危いお時を救つた老人があつた。それは百太郎だった。夜、店の中では相變らず捕物の話はずんでゐた。そこへ梅吉が入つて来て、百太郎が來てゐるらしいから氣を

つけるかと注意する。二十年前百太郎とお米の仲をさいた武兵衛達三人の墓が今義人塚となつて村人に崇められてゐるが、その塚が掘り返されたのだった百太郎が入つて来た。お時は傍で酌をする。そして急に二階へ行つて手鏡を持つて來、二人の顔を並べてうつす。

「おとツつあん！」

だが、百太郎は人違ひだと否定する。お時は、卑怯者と嘲り問ひつめる。母お米の言葉話す。百太郎はヂーと眼をつむつてきいた。ほとぼしり出て來るのは唯悔恨の情だけだった。だが父だと言ふ言葉を吐かなかつた。

「おやちちやねえと思つてくれ」

障子が開いて武兵衛等が現れた。

「お時！お前だけは、泣く泪を汗にして起ちあがつてくれ！驚くお時に財布を投げ與へて寄り來る武兵衛達を倒し伯樂の裸馬に打乗つて何處とも知れず百太郎はまた馳け去つた。

芝居見たまゝ

江戸育お祭佐七

中座花形大歌舞伎

神田祭の宵で、鎌倉河岸の御酒所も賑つてゐる所へ武士倉田伴平が藝者の小糸や箱廻しの九助等を供に見物に來ましてその假座敷で酒を呑んで居ります。

鳶の佐七は仲間の三吉や芳松と一緒に、そこで世話人達との手打も目度なく濟んだので、其儘床几に掛けて、折柄師匠に連れられてきた踊子の勘平おかる、伴内を清元の地で踊るのを見る事にします。ところが、佐七と小糸とは豫て馴染、味けないと知りつゝ人眼を盗む逢瀬は一倍、つひ度が過ぎて伴平にも氣付かれたらしいのです。やがて踊りも濟んで、佐七達も行つてしまひ、小糸も伴平に引かれるやう

にして菊茂登へと参ります。

吉野屋富次郎が矢場娘のお仲や、女髪結のお幸や丁稚と矢張り見物にくるとそこに立塞がつたのがお仲の兄の傳次で、子分達と一緒に富次郎を強請る。そこへ芳松がきて富次郎を助け、多勢を相手の喧嘩に成ります。

菊茂登の奥座敷へつれこまれた小糸伴平の狸寢入に困つてゐると、女中は行燈を取りに立つた。跡で小糸は先に返してくれと九助に頼むが、嫌味を云つて九助が行つてしまひます。むつくり起上つた伴平、本性を現して口説きにかゝり、果ては自棄になつて白刃を振廻すから流石は女、悲鳴をあげて小糸は逃げ出す。はづみに帯をするゝと取られます。

丁度その時、菊茂登の唄外へ提灯をさげて三吉を先に鳶口を持つた佐七が

來ます。芳松の喧嘩に加勢にきたのが濟んでしまつて歸途であつたのです。

途端に小糸が裸足の儘で飛で出る、九助が追つてきて女は遂に長襦袢一枚の姿となり、三吉が見兼ねて九助を叩き倒すと、佐七は女が小糸である事を知ります。そこで、一埒を聞いた佐七が女を家まで送らさうとすると、繼母も何うせお客と一つ穴、此儘では家へも歸られぬと小糸が云ふので、ちやア汚ねへが俺の家へ、と三人が仲好く行きかゝる。そこへ、抜刀を提げた伴平が九助と出て他人の藝者を伴れてゆくとは、と言ひがかりあべこべにやつつけられるのでした。

不風流な佐七の住居も、小糸が來てから仇めいて見えます。二日後の夕方三吉や手傳ひの娘お種や、お勝手仕事も話で夢中——先刻小糸を連れてきてそれも確でなしの挨拶から反對にやら

れて惜々引退つた繼母おてつや九助の噂さ。そこへ湯歸りの佐七が酒屋の丁稚長吉に一樽提げさせて歸つてきます。飯を焚損ねて三吉が頭かきくお湯へ行き、代りの飯をお種が家へ取りに行つた跡は二人きりです。

錢が無いのに愛想もつきやうが、思はぬ詞の行がかりから最う二晩も家へ泊つた新女房と佐七がいへば小糸も嬉しく、五歳の時から貰はれた今の母親又何處ぞへ出て貰がなければ成らぬが一生亭主と頼むは佐七さん、と女は誠は武士の娘だと話します。佐七は實の父が本郷の醫者へ行く途中加賀の行列に出會つて梅田八太夫といふ武士に突飛ばされ、それが原因で病死してしまひ、續いて母親も之を苦に病んで死んでしまふ。加賀の邸は兩親の敵だといふ腹から去年の祭にも大喧嘩をしてやつたが、其武士はまだ生きてゐるとか武士は俺の敵だ、決して伴平等には從

ふな、と睡じい處へ佐七の頭、勸右衛門がやつてきます。

そして、おてつに泣付かれた事を話し之から決して無理は云はせぬから一先づ溫和しく歸つて呉れと云ふのだ。そこへおてつも九助も入つてきてお世辭たら。生一本の佐七は聊か氣まりも悪い思ひをします。

やがて頭が歸り、小糸も溢々せき立てられて歸つてゆき、佐七は獨り跡に残され淋しい氣持でした。

そこへ三吉が歸つてきて、今女が元氣に歸つて行つたは心變りかも知れぬへ今夜一つ行つて見なせへ、といふのに、つい佐七も其氣になります。

柳橋の小糸の内では、お仲の事で傳七とお幸が争ひなどしてゐる折から、九助につれられて小糸がしをくと戻つて來ます。

その無愛想な小糸に伴平は鹿爪らし

く實は同じ加賀藩の梅田八太夫として身が伯父なる人、其落魄の女の兒の行衛を捜してゐるのに頼まれて、若しやと思つて、といふやうな事をいふ。それを驚いた様しておてつが早速文庫から小糸の臍の緒書を取り出して見せる。と符節の合つた記しがき、得堪へず小糸はわつと泣伏します。

巧く行つたと伴平等はにつこり、其儀奥へ亦飲みに行きます。あとに小糸の悲しさは、そんなら佐七さんの親の敵は私の父親か、とても會ふては未練の種いつそ手紙でと、身の言譯を認め。折から佐七が尋ねて來た。それに小糸は別れなければ成らぬ、といふ。しかも奥からどやくと出てきた一同が口々に悪口するので、一圖に小糸の心變りと思ひ違へた佐七は、恨みと怒りに燃え立ち、大勢の爲に戸外へ突出されて、小糸覺えてゐる、の一語をあ

うしたのやら小糸の姿まで見えなく成
まりした。

柳原土手の宵まぎれに、お仲に當次
郎とが心中しようとするのを留めた三
吉と芳松、そこへ女髪結のお幸も来て
兎も角も其處の料理屋へ入つて行き
ます。入れちがひに出刃庖丁を持つた
佐七が飛んできて、つと小蔭に隠れま
す。間も無く一挺の四ツ手駕が駈けて

くると躍出た佐七が棒端の提灯を叩き
落す。不意をくらつて駕昇どもは逃げ
てしまひます。

駕の中には果して小糸の姿、やには
に佐七は之を斬りつけ到頭小糸を殺し
てしまひます。その擧句に、むごたら
しく死骸を足蹴にしたりして、やつと
向ふへ行かうとすると、その足許にか
らまるやうな女の書置。其を拾ひ上げ
何気なく傍の辻行燈の果敢ない燈影

にすかして讀めば、それは女が敵同志
の因果をなげく書置でした。

佐七は泣いて、今更可哀さうな女の
死骸に取付いて嘆きに沈んでゐると、
そこへ伴平達が現れて佐七に斬つてか
ゝつたが、佐七には又三吉が力を添へ
て、つひに伴平は身から出た錆、あべ
こべに佐七の手で討たれます。

廣濟寺と近松座

奇縁を語る佳章氏

兵庫縣の久々知村廣濟寺は近松門
左衛門の菩提寺として有名であり
ますが、三十五、六年前は實に寂
寞とした田舎寺であつた。當時私
は廣濟寺住職とは知人の間柄で、
ある時茶のみ話に廣濟寺は近松の
菩提寺でありながら交通不便の爲
世に知られて居らないが、何とか
して近松と廣濟寺の關係を世に知
らせてやりたいといふことから義

太夫師匠の鶴澤某に私が相談して
素義會を同寺で開催、近松の供養
をかねて大いに宣傳につとめた。
幸にそれがもとなり當時の文樂
座富太夫(今の駒太夫)一座が出
演したり、延若、我童(現仁左衛
門)らの俳優まで乗り出し、いよ
々廣濟寺は有名になつて來た。
それから後近松會を起しそして近
松座建設とまでに話が大きくなつ
たのです。おかげで廣濟寺は本
堂の普請も出来ました。大鳥居は
松竹合名會社と實川延二郎氏の寄
贈であつたと記憶してゐます。

劇場建築専門並二

一般建築設計施工

池上建築工務所

事務所

自宅

東區京橋二丁目四八京阪ビル
電話東七二三一
市外布施町菱屋西二七番
電話小坂五六八番

青年歌舞伎立話

姉小路 孝

A—中座の五月は東西合同青年歌舞伎ですが、何かそれに就いてのお話はありませんか。

B—私は東京俳優とか大阪俳優とかの明確な區別は年と共になくなつて終ふと思ふのですが、今の青年歌舞伎の人が、將來歌舞伎の殿堂を築き上げる頃には、そうした傾向は益々濃厚となつて、双方が一つに溶け合つて終ふのではないかと思ひます。

A—上方狂言の保存と云ふことが八釜しく叫ばれてゐますが、結局どんな形態で保存されるのでせうか。

B—結果は今後上方狂言に適した役者が生れるかどうかの問題だと思ひます。例へば現在では鴈治郎の味を扇雀が傳へてゐます。先づ扇雀のゐる間は、私達は上方狂言を或る程度満喫することが出来る。要は扇雀の次の時代に果して、上方の味を表現する俳優が生れるかどうかと云ふことです。

A—では一ツに溶け合つて終へば將來東京の俳優が上方狂言を演つたりすることになる。

B—現にそうした事はもう行はれてゐる。例へば市川家の

お家藝である「勸進帳」や「助六」を大阪出身の我當が演じてゐる。これなどは從來の因習の點からのみ云へば随分八釜しい問題だと思ひます。

A—結局、自己の持味にある役柄をさへ勉強すればよいのですね。

B—まあ、そう云ふことになりませうね。それにも二つの行き方があつて、最初から自分の領域を意識して、その分野を深く掘り下げて行くやり方と、先づ一通りあらゆる領域に一應手を廣げてから、將來ぐつと引き締めて、一つの分野の仕事に還元するやり方とに分類出来ませう。

A—青年歌舞伎の連中で前者に屬するのは我當ではないでせうか。

B—左様、先づ我當を擧げてよろしいでせう。そして後者の例に勘彌を擧げることが出来ると思ふ。勘彌は大變器用な人で、お祭佐七をやるかと思へば、大森彦七もやると云ふ具合に、あらゆる役柄を征服して行く、而もそれぞれ相當にこなして行くのだから器用なものです。だが將來は段々一つの分野に還元して行くことと思ひます。

A—扇雀にも勘彌と同じことが云へると思ふ。

B—しかし扇雀は既に最近一つの分野に還元しつゝある傾向がある。今迄はやたらに横へ廣げ過ぎた。今度は縦に掘下げて行く事が肝要な仕事だ。その意味でこの傾向は彼の爲には喜ばしいことです。

A—親譲りと云ふ言葉に就いてどうお考へでせうか。
B—そりや歌舞伎は傳統の藝術ですし、完成し盡された型を更に將來に傳へて行く義務が俳優にはある譯です。師匠譲りや、親譲りは、別にさう氣に留めて問題とする迄もありませんまい。それはむしろ當然の現象に過ぎないでせう。只、親の型だからと云つて全てを丸呑みにして終ふやうな認識不足は深く戒むべきことだと思ひます。

革命兒「小太夫」考

阪上勝芳

東西青年歌舞伎は熱のある人々の集りだが、中にも、私は小太夫の舞踊への精神と野心に、將來を期待するものである。彼は獨創の小唄ぶりを發表したし、かつては「越後獅子」の在來の平凡低俗な淫唄のふりを改革して叙情的な新工夫をもつて演出した。近くは、薙刀縦横無盡に振り廻して活躍した「五條橋」のあの潑刺たる活舞臺を忘れる事は出来ない。もつとも本人にいはせると、之は兒猿之助のものを踏襲したに過ぎず、快心のものではないそうだが、而し若さと元氣で押して行く生々とした味をもつてゐた事は否めない。

四月の中座の大切に踊り出した踊りは、凡そ彼としては損な出

し物であり、意味のないものだつたと云へる。狂言の撰擇を誤つた點、氣の毒でもあり、不愉快でもあつた。だが、おかめの面をかむつての優雅婉曲なふりだけは、變つてゐて、面白かつた。

舞踊には、科學と數學とが、入りこんでゐるとは彼の説だ。即ち、音は、科學的原理により、踊りは數學上の計理から、音をよく理解した踊りが、最上のものである。

かの六代目の巧致の極と絶讃される舞踊を見ると、それが肯定出来る。彼は「春日龍神」を三度も四度も見に行つた。六代目が、驚いて、もしやるんなら手をとつて教へやうと云ふ。然し、彼はもつと下役を勉強しまして……といつて辭した。六代目は、彼のその態度に感心し、又その熱心な研究意識にも感嘆し、將來日本舞踊に精神して覇を成すは小太夫である、と折紙をつけて賞讃したさうである。

六代目の踊りには、観客が先づその心臓をつかまれてしまつて、恍惚たる陶醉境に導かれてしまふ。小太夫には、まだそこ迄の力はないかも知れないが、彼の行き方は、その調子である。

◇

小太夫は、今日の傳統と因習の牙城、歌舞伎王國に立籠るを潔しとせない一人だ。何かの機會に歌舞伎の革命をやらうと考へてゐる。歌舞伎の世界から脱出——其處に小太夫の野心ある演劇がある。彼の現代劇への進出も、そのあ

らはれの一つに違ひない。彼が、自ら脚色して主演する探偵小説ものだつて、決して彼の道樂として、笑ひすごしてはしまへない。かつて水谷八重子一座と、日活で映畫化した石川達三の「蒼氓」を、舞臺にかけた事もあつた。

彼は、澤正を失つた直後の新國劇の客員として活躍してゐた時代もあつた。だが、その當時の内部のアツレキに彼は、到底居たゝまれなかつたと云ふ。彼、藝術的良心は、同じ志をもつて、力を協せて突き進んで行く、集りを希ひ願つてゐるのだ。

彼の兄、八百藏が旗擧げた「黎明座」の意氣は立派なものだが、その興行上の失敗は何を物語るか——。そこに小太夫の懊惱の姿もハツキリ見せられる理由である。

だが、私は一日も早く、彼にその機會を與へてやりたい。

小太夫は又、映畫への機會をつかみたいとも思つてゐる。昔マキノ省三の監督で「日輪」を撮つた事があるが、彼ひとり斷然、光彩を放つてゐた。彼を生かせる適材は、餘りにも豊富である。

人としての彼は、その卓越せ所俳優生活を矜持して、腹藏なき考へを披瀝する快男子であり、舞臺にあつては熱そのものであり、樂屋にあつては眞面目な研究家であり、今日の歌舞伎若人の中では、模範たり得る。

東京新派と京都

新橋柳一郎

五月の京都へまる二年ぶりで東京新派大合同劇が來てる。

一昨年五月、喜多村、河合、井上、花柳らの總動員で、「二人妻」、「乗合馬車」、「自活する女」をもつて來て以來のお目見得である。

過去はともかく、最近ではどうも東京新派が京都ではも一ついゝ成績があがらない。(井上、水谷の一座の方は相當いゝ成績をあげるが)その原因が何かといふことはわからないが、所謂「大入叶」とはならない。たゞ昭和九年九月に、總動員で「初すがた」、「葵の上」、「不良少年の父」をもつて兩座へ來た時は連日大入りをつゞけ、俳優連も「珍しいことだ」と喜こんだものだ。この時は昭和八年三月に「唐人お吉」、「二筋道」、「彼等を救へ」、「新釋生さぬ仲」をもつて來て以來、一年半ぶりの來演だつたが、この九年九月の大入りは、同月廿一日の京都の水害と共に永く記憶されやう。水害み目のあたり見た俳優連の恐ろしい思ひ出話など今でも時折樂屋の話題となつてゐるやうだが、同時に全くこの時の新派の京都での成績はよかつた。

然し十年五月の時はベシヤンコだつた。これぢやいよゝ原因がわからない、演し物の關係か、時節の問題か、來演回数が少ないのか、ク東京新派と京都を考へるときいつも惱まされる不可解な謎ともいふべきである。

新派の人たちはみんな京都に馴染みのふかい人ばかりだし、「京都は全くいゝね」とお世辭でなく讚美する人が多いのに、どうも京都の見物はこの氣持を喜んでくれないらしい。花柳章太郎丈なども、「京都はわれ〜には念願の地、憧憬の都なんです、どうもお客様とピツタリせないらしいです、それだけに京都公演と聞くと、とてもハリ切るんですが、同時に恐くてたまりませんといつか筆者に語つたこともある。つまり宿願の興行地であつて苦戦の地といふわけなのである。「京都へはいつ來ます」と誰に聞いても「早く行きたいですね」といふ。「何かいゝものを見せて下さい」といへば「サア、京都といふところはむづかしいので、どんなものが喜ばれるまだ見當がつきませんが」といふ。それほど京都は厄介なところらしい。

こんどは前と比べて井上正夫が加はつてゐないのは淋しい。それに女優陣が皆無だが、それだけに生粹の東京新派が見られやう、喜多村、河合、花柳と三巨頭がみな女形だけに、女優軍の加入が時によつては切角の味をブツ壞すこともあるので、こんどのやうに交りツ氣なしの一座もいゝ。水谷八重子のやうな、或ひはそれ以上の女優の群出せぬ限り、やはり女形のよさを推賞するわれ〜はこんどの

やうな顔ぶれに大きな期待をかける。

演し物も巖頃東京、大阪での新派五十年記念興行で好評だつた眞山青果氏の「淺草寺境内」を第一に据え、第二に山本有三氏の大朝連載の「路傍の石」第三は吉井勇氏の「小春髮結」第四は泉鏡花氏原作、川村花喜氏脚色の「瀧の白糸」の四本立て、喜多村、河合兩巨頭の相變らすの織細巧緻の至藝が存分見られるし、花柳、柳のコンビの「瀧の白糸」がやはり呼びものとなつてゐる。

こんどは十五日間の半月興行だが、この際京都の好劇家は東京新派を男にしてやらねばならない。

歌舞伎、喜劇、新派とも相當關心をもつ京都の觀客がひとり東京新派を繼子扱ひにするのはよろしくない。俠氣を大いに出してこんどの公演には一花咲かせ、錦を飾らせたい。そして東京新派が京都の見物衆とスツカリ仲よしになつて年に二度位は喜んで來られるやうにしたいたいものだと思つてゐる。(十二、五、一)

舞歌伎川柳募集

○扇雀、成太郎、鶴之助、勘彌、松延、我當等の青年俳優の舞臺を詠みたるもの

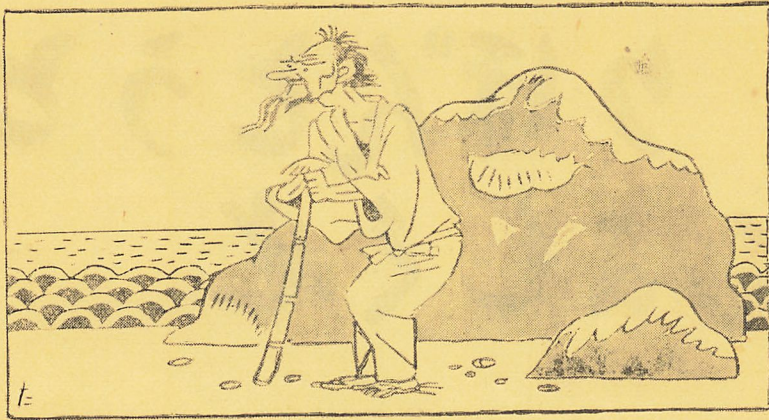
選者 森 ほのほ

▽佳吟には謝意を表して選者より粗品を呈上

投句所 京都市北白川平井町森方宛

と"とうと"ぼんとう せいくよん





漫畫鬼界ヶ島

大槻 たもつ

「エー今日は、時に好い時候で」

「ヤー〜暑からず寒からず」

「まつたく、好いお天気で、非常時で」

「アレツ人は見かけによらん」

「何が見かけによらんだ。お天道様が照つてりや好いお天気に間違ひないはづ」

「さゝそれは好い、お天気は好いんだがその次に續く非常時が……」

「何をウこの何時も呆んやりしてる僕が、非常時と云つた、それが人は見かけによらんと云ふ原因か、いやさ、根源か、認識不足も甚しい。眼を大きく開いて廣く我國の周圍を望見して見なはれ、北方遙かに滿洲國を境として虎視耽々のぞいてゐる」

「何が」

「エツ」

「何が虎視耽々と覗いてゐるのだい」

「何がつて悟りの悪い男やな、外國がヨ。地圖を見てもなはれ、たまには、又南方洋上遙かには吾が新領土の彼方に遠く」

「外國が虎視耽々かネ」

「先廻りしなはん、あんたはすぐ人の話を先廻りをする、そして手を出したがる悪い習癖を有してゐる」

「何ツ、放つとけツ大きなことばかしぬかしやがつて、お次は西方遠く黃海を隔て、支那大陸に面し東は遙か太平洋の彼方、アメリカがあると云ふんだらう。へん笑はしやがるはゞかりながら其れ位のこととはあんたに説明して貰はんでもチャーソンと存じてるワ、くそ

面白くもねー」

「オヤツよう知つてはる、その通りだ。あんた世界地圖見たことあるのか」『なめるないツよう聞け、この間新聞の附録に付いて来た地圖よ、息子の奴が俺の前へバツと擴げて、お父つあん、これが日本だヨ、これが太平洋、これが滿洲國と得心のゆく迄教えて呉れたんだ。日本は世界の眞中に在るんだ、地圖で見ても北、下は南と云ふんだ。よく覺えとけ、アメリカは右に在つて支那は左、だから支那の國は何時も左前でゴタ／＼續き、アメリカは右だからそれ禁酒國なんだ、エヘン、ないんだいその面は』『とーらい又先廻りしたネー、アメリカは右に在つて禁酒國、うまいこと云ひやがつたナ。ぢや君、聞くが吾が南の生命線、即ち海の護りの島々の名前は何んと、いやさ、何んと／＼』『オヤ／＼芝居もどきでお出でなすつたネ、敵に後を見せるも何んとやら、問はれて名乗るもおこがましいが、私や大島御神火育ち父は江戸から島送り、波浮の港にや夕焼小焼、三原山から噴火口見れば胸に煙が絶えやせぬ。てなもんやないか／＼』『コレツ何んと云ふけしからん奴だ。この非常時に際し國防第一線に立つて憂國の意氣に……』『燃えて上るはオハラハ櫻島か、敵は幾億ありとても鎮西八郎爲朝の』『なんぢやあー？』『あの人がネーホラ弓を引張つて船を沈没させた邊りに一ツ有名な島があつたネー』『あれは鬼界ヶ島、唄にはならん』『それ／＼その鬼界ヶ島にほれ、何んとか云ふ奇怪なルンペンの坊さんが居たナ』『それは俊寛』

「アラツその俊寛ヨ」(完)



松竹キネマ京都作品
オールト一キ一

旅の陽炎

脚本監督 犬塚稔
撮影 片岡清

キヤスト

横堀の關次郎	林長二郎
喜三郎	坂東橘之助
お茂	井上久榮
百匹のお芳	北見禮子
鞍方の藤九郎	中村吉松
畦の萬吉	風間宗六
新田の丑松	山路義人
鍛山林右衛門	新妻四郎
古座谷の兵十	志賀靖郎
百姓	梅田菊藏
乙	朝田一熊
丙	石原須磨男
井原や亭主	中村政太郎
盜難に逢ふ男	小川埤次

“梗概” 浮雲の如くに當途ない旅を、所持品としては腰に落した一本刀に託して流れ

歩く旅博奕、横堀關次郎が夜露を凌ぐ辻堂でゆくりなくも泊り合せたお茂、喜三郎の駈落者が追つての新田の丑松、逢田村の目吉、鍛山林右衛門のため捕えられようとしてゐるのを見て行きが、りから買つて出て二人を逃がしてやつた。お茂が家田の際持出して来た、五十両で二人は江戸へ出て暮しを立てやうといふのだつたが關次郎から助けられて間もなく渡つた渡し舟の中で、隣り合せた女道中師の百匹のお芳に、その大切な五十両を掏られそれを氣附ひて追つたが掏られたと思つた財布は何時の間にか關次郎の懐中に預けられて喜三郎はお芳の相棒鞍方の藤九郎、畦の萬吉の爲に散々ひどい目に逢された。ゆくりなくも五十両入りの財布を手に入れた關次郎はそれが何のために自分の懐中に放り込まれたかも考へず、すつかりいゝ氣持になつて宿場一番の宿井原屋に泊り込み、お大盡を極め込み宿の者案内で座古谷の兵十の賭場に行つて、そこで又大賭け、すつかりいゝ氣持での戻り際——預けた金を取り戻さうと同じ宿に泊り込んだお芳の云ひ附で賭場迄つてた萬吉が後をつける中、五十両を盗られては江戸へ出て暮ししたお茂、喜三郎が身投げしたのを通り合せてそれを見掛け、裸になつて河へとびこみ二人を助け出す隙にまんまと關次

郎のに脱ぎ捨てた着物の中から五十両に利まで生んだその財布を奪つて逃げてしまつた。お茂喜三郎は救つたが、金を糺られた關次郎はトタンにしほれ、たつた一つ残された刀を抵當に二度座古谷の賭場に出掛けがスツテンテンの上に、座古谷の所に草蛙を脱いでゐた丑松らにつけられるところとなつたが、何も知らぬ關次郎は今も觀念してお茂、喜三郎を連れて井原屋へ戻り、二人に安らかな一夜を明かさせることにしたが、扱て朝にもなれば二人を先に旅立たせ、後で自分はコツソリと逃げ出さうとその逃げ道を調べて置かうとする中あやまつて轉げこんだ藤九郎、萬吉の部屋で奴等がチヨロマカシタ財布を取り戻すことになつたが、その時には早くも丑松らに手を貸した座古谷一家の乾分達が押寄せ、關次郎を殺してお茂、喜三郎の二人を丑松の手に渡さうとしたか、茲に到つて關次郎の奇策大ひに効を奏してさしもの敵方も關次郎の浴びせかける藍の水鐵砲に散々の態たらく——さん／＼座古谷一家を繼しておいて關次郎はお茂、喜三郎の二人を逃してやらうとしてフト思ひ出して取出した件の財布——それはもと／＼二人のものだつたものを何の雜作もなく握してやつたのだつた。

女 同 志

原作 吉屋 信子
脚色 畑本 秋一
監督 西 鐵平
撮影 樗木 喬

キヤスト

澁川 章	植村謙二郎
清浦 登美	古川 登美
坂本 香代	眞山くみ子
壽美子(章の妹)	久慈 行子
タイピスト眞弓	御影 公子
高利貸 龜山	大友壯之介
澁川の義母	池田 園子
登志の母	明 清江
登志の弟	岩 永 整
編輯 長	大井 正夫
麴町の御前	中村順一郎
女 給	春野 蝶々

//梗概// 強ひられる結婚から逃れた坂本

香代は東京で自活し乍ら畫に精進してゐる親友清浦登志を頼つて上京したが間もなく不圖した機會で若い畫家の澁川章と相識り戀て戀愛にまで進んだ。勝氣な登志は香代を妹のやうに愛し共に貧しさと闘ひ乍ら繪の道に勵むことを誓つたのであつたが、それだけに香代が澁川に心を惹かれることが登志には不快で堪らなかつた。それはやがて澁川に對する憎惡とさへ變つたが、登志の氣持とは反對に、香代と澁川の戀愛は急速に熱烈となり遂に香代は登志との誓ひを裏切つて彼と結婚してしまつた。澁川は義母と感情の衝突があつて妹の壽美子と共に高利貸の鶴山から金を借りてさゝやかな喫茶店を經營し乍ら繪の勉強をしてゐるのであつたが、その生活は決して樂ではなかつた。登志の精進は酬ひられて新聞雜誌の挿繪畫家として一躍名聲を得るに到つたが澁川と香代の生活は日一日と苦しくなつて行くのであつた。自分を裏切つた香代ではあるが、登志は友として、彼女の窮狀を見過すことは出来なかつた。一度は憎んだ澁川の爲

登志は雜誌社宛の紹介を與へた。けれども愚劣な小説の挿繪を描くなどと云ふことが眞の情熱を以て畫道に精勵するものにとつての墮落とする澁川には折角の登志の好意も無駄だつた。登志は又香代に勸めて澁川の繪を知合の富豪の許に賣込ませやうとしたが、富豪のほんとうの目的が繪よりも、美しい香代の肉體にあることを知つては所詮この登志の計らひも惜しい思ひをさせるだけに終らねばならなかつた。追ひ迫る生活苦の中に澁川は病を得て倒れた。香代は壽美子と共にダンサーとして働くことゝなつた。併し彼女達の僅かな収入は鶴山への利子にも足りないものだつた。次第に悪化して行く澁川に醫師は轉地を勧めたが現在の彼等には思ひも寄らぬことだつた。香代は遂に悲しい決心の下に昔て自分を望んだ富豪の許を訪れた。彼女の置手紙に依てそれと知つた登志の心に、油然と湧き起つた香代への純愛はまつしぐらに彼女をして香代の後を追はせたのであつた。それから間もなく登志と壽美子に見送られた澁川と香代は明るい希望の中に轉地の旅に上つたのである。

新興キネマ大泉撮影所特作

合歡の並木

原 作 加 藤 武
脚 色 陶 山
監 督 小 石 一
撮 影 青 島 順 一 郎

キヤスト

彌 勇 眞 誠 喜 時 お 千 お お	美 代	霜 波 道 子 高 子 江 子 吉 子 藏 吉 平	田 中 筆 子 野 由 美 子 崎 愛 子 瓜 文 子 澁 鈴 子 藤 代 新 子 御 影 公 子 淺 田 健 三 鳥 橋 弘 一 植 村 謙 二 郎 小 宮 一 晃
---------------------	-----	---------------------------	---

梗概 // 華やかな都會への憧れから故郷を捨てたお波ではあつたが彼女が都會から酬ひられたものは偽りの戀が生んだ子だけであつた。それさえも不實な男の爲に奪ひさられ身も心も疲れ果てた彼女を常に姉のやうな氣持でいたわるのはお波が都

スセロプ
作製板看術美

るゆらあ
告廣傳宣

社事商告廣

造勝中田

前日千阪大
番〇九七三戎電
ルクナミ

會で得た唯一の友千代子だった。千代子の切なる勧めに依て兎も角彼女は歸郷した。けれども一度故郷を捨てたお波に對する家族の態度は冷たかつた。唯母のお霜だけが心から温かい愛の手をさしのべて傷ついた小鳥のやうな我子を迎えた。郷里の青年勇吉は嘗てはお波と未來を約した仲であつたがお波に去られた後周囲の勧めで時江と云ふ娘と結婚することになつてゐた。けれどもお波の歸郷に依て勇吉の氣持には大きな動搖が來た。母はお波が父親や兄弟姉から冷淡にされるのを見兼ねて山を越えた町に住む次男夫婦の許へ托すことにした。間もなくお波は千代子からの手紙に依て男の手にある我子房子がその後入り込んだ喜美子と云ふ女給上りの女の爲虐げられ通してゐると知り堪らなくなつて再び故郷を後にした。房子いとしさに男の許を訪れた彼女はそれが眞實我子でありながら喜美子の爲却つて理不盡な云ひがよりとさへされて茫然自失をさまよい歩いてお波は自暴自棄の末遂に底知れぬ淪落の淵に沈んで行くのであつた。日は流れた。そしてある日お波は圖らずも廻り合つた千代子から房子が故郷の家に引取られたこと、母お霜の病篤きことなどを聞いた。荒み切つた彼女の胸に母としての崇高な愛が蘇つた。病床に尙且己れのことを案する母に對する自責が犇々とその魂を鞭つた。故郷への夜道をお波を乗せた車は走りにつつた。着いだ我家には既に母の優しい聲を聞くことは出來なかつた。けれども微笑さへ浮んでゐるやうな安らかなその面は歸つて來た我子を喜び迎えるかのやうであつた。

「時江さんと仲よくね」親子二人の新しい生活に入る決心をして再び都會に向ふお波の勇吉に残した——それは最後の言葉であつた。

◇テシト「一トツモ」ヲ價安・實確・速迅◇

劇
舞
場
裝
飾

營業品目

店頭裝飾	徽章
室内裝飾	造花
町内飾付	久壽玉
催物裝飾	花環
	花簪

各意匠、裝飾、考
案調製致シマス

船場一〇七〇番へゼヒ御電話ヲ……



店 商 村 上

目丁三町寺寶久南區東阪大
番七〇二二阪内座ロ替振・番〇七〇一(83)場船話電

編輯後記

★花の名残も何時しか過ぎて、庭の青苔の匂ひに初夏を思ふ季節である。萬目新緑の中に躑躅の色が鮮かに浮び上る。自然が最も神秘的となみを始めるとき、三世歌右衛門の追善興行が壯麗な装ひをこらして開幕される。

★ために中村歌右衛門、その不自由な體軀に鞭打つて十二年振りに來阪出演。追善興行とは云へ、一途に我子、孫等の襲名に錦を添へるためと思へば、私達は今更乍ら、その美しい情愛の強さに感激せられずには居れないのである。そして、その感激を久遠に記念するべく、此處に歌右衛門來阪特輯號を綴つて諸賢に送る。

★之に加ふるに五月の道頓堀には、好調の東西合同青年歌舞伎と、躍進目覚ましき前進座とが來演して、互ひに特長ある主角を示

し合へば、今月の關西劇壇は此處さながらに歌舞伎の萬華鏡の趣きが深い。

(京都・大橋孝一郎)

★五月興行の大坂劇壇は全くハリキリ陣容で、まづ歌舞伎座の三代歌右衛門百年追善記念興行と銘打つた東西合同大歌舞伎、ついで中座の扇雀、我當らの澁淵たる花形歌舞伎、浪花座は前進座で「暫」や「百太郎騷ぎ」など他の劇團に見られない演出振りなどで人氣を呼び、角座は「母なればこそ」や「朱と綠」など新聞連載ものを上場豪華な舞臺を見せてゐる

★歌舞伎座の「春日局」は足腰立たぬ歌右衛門が淀君で流石名優だけあつて坐つて一世一代の妙技を見せて關西劇壇近來の異色篇として絶讃を博してゐる。

★本誌も各座の豪華陣容を紹介するべく大いにつとめた。御批判を乞ふ。

★未筆乍ら本誌に御寄稿下さいました諸先生に厚く御禮申し上げます。

池尻勝彦

昭和十二年五月一日發行
月刊「道頓堀」第十二年
雜誌「道頓堀」第百廿八輯

◇誌代は前金お拂を願ひます。
◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪府北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

部一 金三十拾錢(郵錢五厘)

昭和十二年五月一日印刷

昭和十二年五月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

共同編輯 山江 貞也

印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部
編輯京都支部

京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始礎 辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹼

専賣特許 密用新案

スキナ御化粧紙

(あぶら取兼紙白粉)

各品共御愛用を乞ふ!

標商録登



大坂 發賣元 朝日堂株式會社

大坂 本舖 中田スキナ屋謹製



池尻勝彦

京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

昭和十二年十月廿五日第三種郵便物認可
 昭和十二年四月廿八日印刷(毎月一回)
 「道頓堀」第百廿八輯第十二号五月號

松竹京都特作映畫

林長二郎主演

犬塚稔脚本監督岡清撮影



旅の炎



「お夏清十郎」以来の
 長二郎・犬塚の名コンビ
 陽炎もゆる秋の街道に展開する
 エーモラスな股旅もの、明期新
 機軸篇ノ

坂東橘之助
 井上久榮
 北見禮子
 中村吉松

風間義宗
 山路義人
 石原須磨
 新原四郎
 志賀靖郎

「道頓堀」

第百廿八輯 第十二号 五月號

一部金參拾錢